



電子複写不可

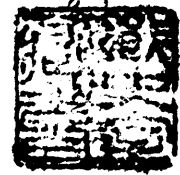
一復史料
原本史料

自昭和三十年三月二十日
至同日六月三十日

第八飛行師団戦斗詳報

昭和三十年七月三十一日
第八飛行師団司令部

防衛庁修版



冊数
2700-1
1/2

(陸空)
本土周辺
31

自昭和二十年三月二十日
至昭和二十年六月二十日

第八飛行師團戰鬥詳報

昭和二十年七月三十一日
第八飛行師團司令部

自昭和二十年三月二十日
至昭和二十年六月二十日

天一號航空作戰要聞詳報

昭和二十年七月三十一日
第八飛行團司令部

陸軍

目次

- 第一 戦前前に於ける彼我形勢の概要
- 第二 戦前に影響を及ぼせし天候氣象及地形の状況
- 第三 交戦せし敵の編成裝備戦法等
- 第四 各時期に於ける戦場經過並に關係各部隊の行動
- 第五 戦場後に於ける彼我形勢の概要
- 第六 今次作戦（戦前）に於ける戦況
 - 附圖第一 三月中旬頃に於ける敵進攻兵力並に之に伴う空海勢力の判斷要圖
 - 附圖第二 作戦開始時に於ける戦場の展開態勢要圖
 - 附圖第三 六月二十日頃に於ける沖繩方面の敵情要圖
 - 附圖第四 六月上旬沖繩方面に對する作戦中止時に於ける戦場の態勢
- 附表第一 戦場支隊隊果一覽表

附表第二	死傷表
附表第三	兵器損耗表
附表第四	燃料損耗表
御首 案	

第一 戦前前における彼我形勢の概要
 一、戦前前における敵軍の状況
 比島方面

レイテ作戦に引續き北比島の作戦に着手せるマツタアサー
 一麾下の米軍は三月上旬迄比島方面重要飛行場を悉く占領
 し鋭意次期作戦の準備中なりしが三月中旬頃迄には少くも爆
 撃機八〇〇機、戦闘機七〇〇機を下らざる兵力を之等の飛行
 場に展開し戦爆連合の大編隊を以て隨時臺灣方面に突撃する
 に至れり

二 中部太平洋方面

二月中旬頃米航空母艦部隊に臨力中なりしニミッツ麾下の第五
 八機動部隊は一部を以て三月一日神尾本島に突撃し主力は五
 日頃ウレンシーに降投し次期作戦を準備中なりしが三月十八日
 再び九州方面に突撃せり此の間中(南、西)部太平洋方面に

於ては敵機進着の動きを極めて活潑にして三月十七日頃に至り東海方面の逐次マリヤナ方面に集結せる状況漸次顕著となりし事既に三月二十三日朝東有方なる機動部隊は沖繩及宮古島附近に集結し引續き沖縄本島周邊の諸島嶼に上陸を開始するに至れり

三月中旬頃に於ける敵機進着兵力に之に伴ふ空海勢力の判明
附圖第一の如し

二 要聞前に於ける我軍の状況 八 全般の状況

前述の如き敵情に備ふ第三十二軍に於ては二月下旬末其の守備を廢にし敵の來寇に備ふると共に航空關係に於ても陸海軍中央協定及東支那海周邊地域に於ける航空作戰指導要領に基き次々準備に着手する所ありしが天候航空作戰に於ける戦力の空位とも稱すべき特攻兵力の繰出しは中央の努力にも拘らず豫定の如く進捗せず遂に三月下旬に至るも一隊も南西諸島

より行ふ攻勢は大なる支障なく實施することを得たり
爾後四月より五月中旬に到る間は大陸高氣壓と北太平洋高氣壓との勢力交代期にして移動性高氣壓頻りに發生し其の中南支より東支那海を逐て臺灣、沖縄方面に移動するに方り作戰地域は長日は十日短きは兩三日全般に好天持續し高氣壓更に東進して後田となるに及び次の移動性高氣壓の到來迄一兩日一假に天候悪化するを常とせり

斯の如く氣象の推移は概ね周期的なるも其の變化の頗る迅速なりしは本期間に於ける特徴すべき特徴なりき
本圖は前述の如き氣象の特性と月の中旬より翌月初頭に及ぶ月明期との關係を考慮し周期的好天の機會を敏速に捕捉して攻勢を實施し五月中旬頃迄は大なる氣象の障礙に稱せらるゝことな
く概ね順調に展開を遂げしに於て四月二十二日及二十七日の傳
事及夜間の攻勢は月明と目的地附近の好天とに恵まれ大なる戦
果を收めたり然るに五月下旬に及び南西風の勢力漸く増大し不

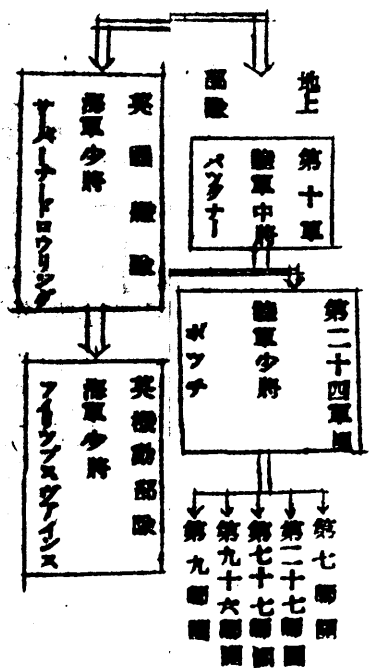
連續線は沖縄、臺灣の線に停滯十八日以降月末に到る迄連日陰曇なる天候持續し此の間揚子江下流又は福建省附近に小低氣壓發生して次々に東進す又臺灣附近上層に南風の侵入顯著にして九州、沖縄間比較的天候良好なる場合と雖も宮古以西は厚き雲層に蔽はれ飛行に困難なる状況を呈し遂に五月二十四日夜決行せられたる變號作戰に策謀せんとする師團の出撃企圖は之を放棄するの止むなきに至れり

ニ地形の状況

宮古島、沖縄本島間約二百軒の間之を連続づる島嶼の存在せざることとは我が航法特に夜間の航法を誤らしむる原因となり之が爲機多の犠牲を出せり
右に反し九州方面よりする島傳ひの進攻は技術劣等なる特攻隊と雖も殆ど勝導の必要なく又臺灣本島よりの攻陣に於ても魚釣島より赤尾嶼を経て久米島に亘る一連の島嶼は我が進攻の爲航法の基準點として比較的有利に利用せられたり

第三 交戦せし敵の編制、裝備、戦法等

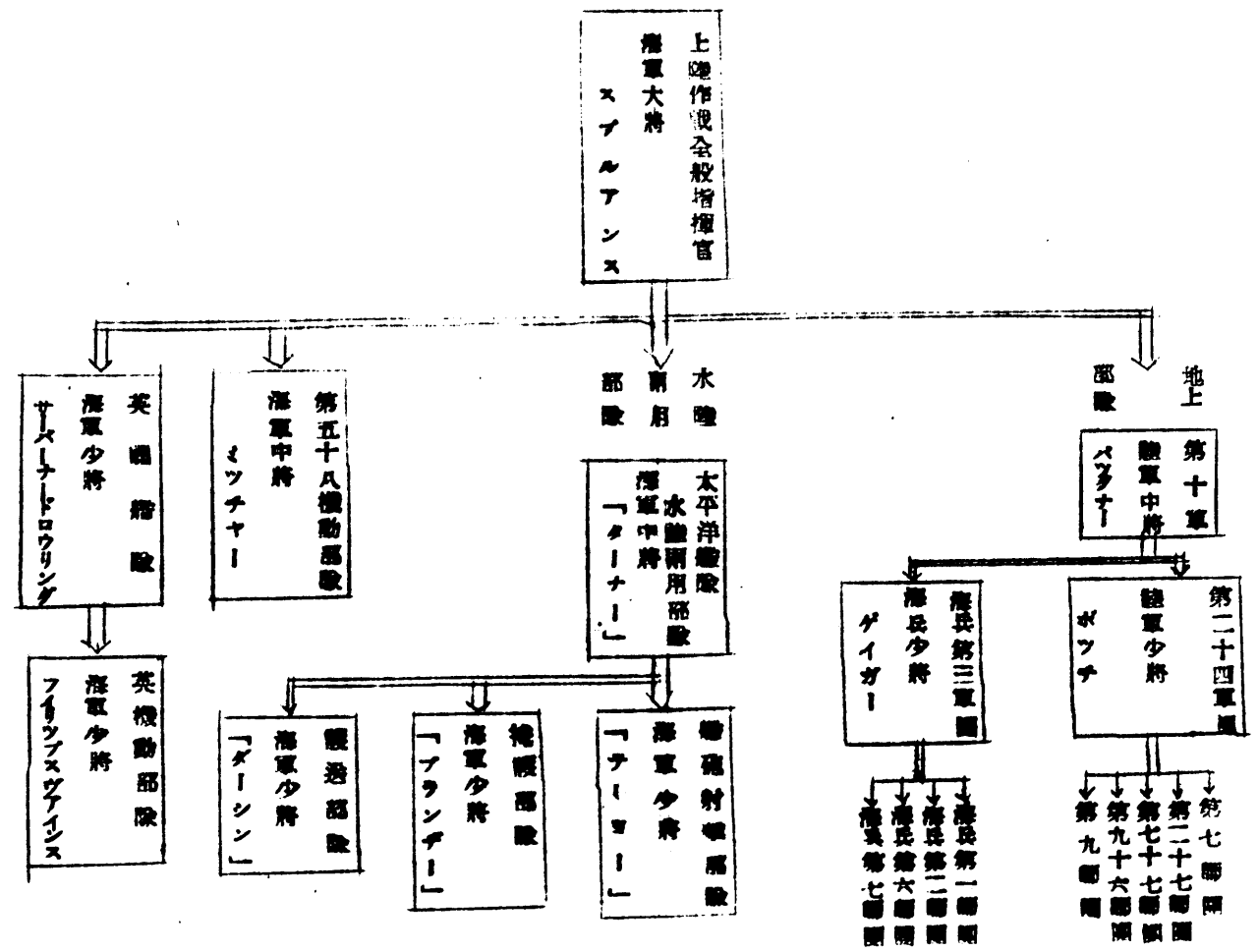
一、交戦せし敵兵力團特務隊師の氏名左表の如し



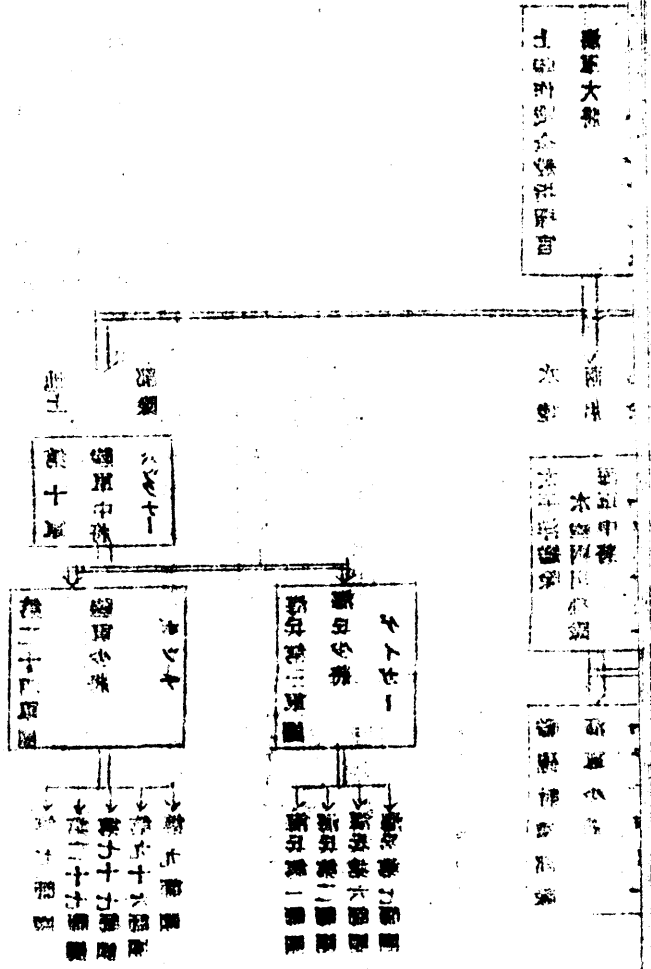
イギリス海軍少将 ヤムートロウリン

島より赤尾嶽を経て久米島に亘る一連の島嶼は我が進攻の爲航法の基準點として比較的有利に利用せられたり

第三 交戦せし敵の編制、裝備、戦法等
一、交戦せし敵兵力團體將帥の氏名左表の如し



一、支那軍の動向に對する觀察の點、變遷、豫定等
 二、支那軍の動向に對する觀察の點、變遷、豫定等



及臺灣方面に到着せずして敵を迎ふるに至れり
 又第三十二軍の防禦方針の是正問題（北、中飛行場を中核とする水際決戦思想に變更せしむる件）兵力の増強（昨年十一月抽出せる兵力の補填）竝に地上配備の變更等に關しては昨年末來第八飛行團の意見具申を中核として大本營、第十万團軍司令部、第三十二軍間に於て數回に亘り各種の接洽を重ねたるも遂に實現に至らずして戰闘開始となる

2 團軍の状況

團軍は航空作戰の見地に過ぎず昨年末來屢々第十万團軍に對し第三十二軍に對し沖繩に對する兵力の増強、守備重點の北、中飛行場正面への轉換等に關し意見を具申（開陳）する所ありしが容易に實現を見ざりしを以て昭和二十年一月及同二月大本營の主宰に係る兵棋演習の實施に方り作戰主任參謀を派遣して更めて之等主要問題の即決に關し意見を具申せしむる所

あり

又他國海軍は方面軍の天誅航空作戦要領の示す所に基き第六航空軍と所要の協定を行ひ作戦（戦闘）の具體的準備を立案すると共に参謀を九州に派遣して新に編成に配属せられたる特攻隊の準備に推進に勉むる等若々沖縄方面に對する作戦準備を促進しつゝありしが三月中旬概ね諸隊（中央より配属せられたる特攻隊を除く）の作戦準備を完整し所屬一待つあるを待むの狀態に於て戦闘開始となる
當時に於ける海軍の展開態勢附圖第二其の一乃至其の三の如し

二 戦闘に影響を及ぼせし天候、氣象及地形の狀況

一、天候、氣象の狀況
本作戦開始の當初は北東季節風のため臺灣北部及東岸一帶天候不良なりしを以て宜蘭及花蓮港方面の基地使用は氣象の障害を受くると比較的多かりしも石垣以東下層雲薄く先島群島方面

敵側發表に依る船艇總兵力一四〇〇隻
地上交戦兵力八乃至一〇個團

二、敵の編制裝備素質戦法に關する觀察
ノ米第五十八機動部隊

二月上旬確實島攻略作戦前新銳航空母艦隻を編入し周到なる準備を實施し今次沖縄作戦に於て確實島作戦一關終結するや引續き急進整備の後九州方面に東渡爾後沖縄本島上陸作戦に當り主力主として沖縄以北の我が航空艦隊に任じありたるもの如し

編制の概要左の如し

- 指揮官 海軍中將 マーティンツチヤイ
- 第一群 ホーネフトワスプベニトン（メロウツド）
- 第二群 レキシントン、パンコック（サンジャシント）
- 第三群 ヘンカビール、エセワクス、シヤングラ（カウメンス）
- 第四群 ヲータタウン、ランドルフ（カボット）

第五群

エンタープライズ、サラトガ、レンヂャー

裝備上従前に比し大なる變化なきも益々戦闘機を主幹とし直
備兵力を増強すると共に一部の空母には夜間戦闘機のみを搭
載し夜間の上空哨戒に専任せしめ我が特攻及夜間攻撃に對處
しありたるものゝ如し

米機動部隊機體搭乗員は比較的戦闘意欲旺盛なるも一般に
技倆は良好とは認め難し

2 米機動空母部隊

従來作戦開始前機動部隊の機動哨戒等に任じありしものにして沖
繩作戦開始せらるゝや主として英機動部隊と協同し先島方面
の我が前進基地制壓に任ぜり

特設空母を以て編制せられありて(第五十一機動部隊と稱す
其の一例左の如し

特設空母 一〇 驅逐艦 一〇
ステイマールベイ ツラギ ベテローベイ マウンドボ

イント スウオニイ マーカスアイランド ウエーナ
アイランド マカツサルストリート等
編成裝備上特に見るべきものなし

3 英國機動部隊

二月上旬其の太平洋機動部隊を噴傳せられ三月上旬中部太平
洋方面に進出しありしが本大作戦開始せらるゝや主として先
島群島方面の特攻基地制壓を擔任臺灣に對しても來襲せり
其の攻撃状況等より見るも攻略的企圖濃厚にして戦意旺盛な
らず

又上空偵察機極めて嚴重英國軍の特性を遺憾なく表はしあり

編成の概要左の如し
制式空母 三 ヴィクトリアス、インディアナカプル、インドミタ
ブル

特設空母 二
艦 二 キンダチヨード五世 ハウ

(五月十日俘虜情報)

3. 敵の執りたる戦法就中特攻対策

敵は数次に亘る我が航空攻撃に依る船隻の損耗に對し種々の対策を講じありしが其の今次作戦に於て現出せる主なるものを述べれば左の如し

- (1) 沖縄本島進攻に先立ち慶良間群島を攻略し對空火力配備電波警戒機の設置等に依り慶良間泊地の防備を強化し本島攻撃の據點とせり
- (2) 有力なる機動部隊を以て晝夜我が攻撃基地を刺撃すると共に北中飛行場に海兵航空部隊を急進に推進し空襲戦場上空に常時數十機を在空せしめ夜間は夜襲を以て哨戒を實施せり
- (3) 有力援護艦艇は晝間は離岸に近接地上作戦に協力しありたるも夜間は慶良間西方又は南方海面に後退し我が攻撃を回避せり

避せり

- (4) 當初敵艦艇は我が夜間攻撃に對し専ら對空火砲に依存せしも中期頃より煙幕を展張し我が攻撃を困難ならしむるに努めたり殊に慶良間泊地は朝夕煙幕を展張するを常とせり
- (5) 敵は多数の船隻損耗に備み相當数の工作艦を慶良間の泊地夜高手の沖附近に進出せしめ毎日十数隻の修繕を實施しありたるものゝ如し
- (6) 敵は先島群島の攻撃基地に對し連日時限爆弾を以て我が飛行場使用拘束に勉めたり

第四 各時期に於ける戦場通過に關係各部隊の行動

一、戦場通過の概要

三月二十三日早朝有力なる敵機動部隊沖縄及宮古島に突襲せしを以て敵艦は直ちに對機動部隊攻撃準備を下合すると共に沖縄方面の搜索力を強化しつゝ待機せしが翌二十四日沖縄本島南端海岸附近に數十隻より成る有力艦艇現出して我が地上陣地に對

し砲撃を開始するに至りしを以て直ちに作戦即興の態勢に移
し隨時の攻撃を準備す

次で翌二十五日諸情報を総合せる結果敵の本格的上陸進攻意
蓄となりしを以て師團は在九州の西参謀及在沖縄の神参謀に對
し逐次到着する特攻隊を指揮し沖縄周邊の船艦を攻撃すべきを
下令すると共に同夜敵機動部隊慶良間群島附近に現出被支中な
るを偵知せしを以て愈々攻撃を開始するに決し翌二十六日早朝
一席を以て之を攻撃す

爾後沖縄本島に對する掃蕩射撃逐次熾烈となり敵船の動き亦
慶良間群島を中心として愈々活発化せしも掃蕩の動向其の他全
般の状況より敵の沖縄本島に對する上陸の氣配は比較的僅少な
るが如く判断せられしを以て師團は「敵は先づ沖縄本島周邊の
島嶼を攻略したる後沖縄本島に上陸を企圖する算大なり」と判
断し之を關係方面に打電す

此の頃電報の傍受等により「第六航空軍及聯合掃蕩主力は依然

攻撃準備中にして主力の攻撃開始は更に數日間遲延の見込なる」
を承知せしを以て師團は過早の兵力投入を戒め適宜兵力の投入
を抑制しつつ、奸機を捕捉して行ふ一區の攻撃を續行す然るに四
月一日敵は沖縄北、中兩飛行場西方海岸に本格的上陸を開始せ
しを以て師團は豫め準備せる所に着き直ちに主力の攻撃を開始
せり

斯くて攻撃を續行すること約二ヶ月餘六月上旬に至り沖縄本島
方面膠戦の態勢自ら明瞭となれると宮古島方面に對する敵の進
攻企圖逐次減化の状況を呈し有れるを以て師團は一兩沖縄方面
に對する攻撃を中止し主として戦力の充實を圖りつつ、敵の新企
圖に備ふ

別紙

八飛艦参電第一五六四號（三月三十日）

臺灣軍参謀長 宛（参謀次長靖球参謀長）

敵の沖縄方面に對する上陸の時機に關しては一爾三月三十日前後と判斷し作戦を實施中なりしも最近に於ける敵の動向其他各敵の關係等よりして左記の如き判斷亦相當考慮を要するものと思考せらるゝに付、閣下としては之に關する準備に遺憾なきを期しあり上可に於ても同時機（現在は月齢上夜間の兵力投入容易なるも四月中旬は殆ど不可能となる）に於ける航空戦力發揮に關し速かに善處方配慮相煩度

尙之が爲速かに上可に御願すべき事項左の如し

一 決戦兵力を四月上旬迄に集中特に長距離夜間進攻可能なる機種の増強

二 輸送品其の他を以てする夜間空輸に依る（人員飛行機）南西諸島への點付兵力の増強

左右に伴上敵方準備

左記
判決

敵は我が配備の薄弱なる沖縄本島附近の島嶼に上陸據點を推進したる後四月中旬以降沖縄本島に上陸を開始するならん

理由

一、薄地航空の威力十分ならざる沖縄方面に於て軍なる機動航空のみは依存して精突放膽なる上陸を實施せんとするは無謀にして聯合戦略的意義ありとするも我が陸海軍航空部隊に海軍水上艦隊の存在する現状に於ては極めて危険なるのみならず大なる損害を招く結果となるは明にして損害を極度に忌避する敵としては採らざる所なるべし

況んや感受性極めて大なる敵が硫黄島大出兵作戦に苦杯を嘗めたる直後斯くの如き作戦を遂行するとは考へられず従つて敵若し懸命に沖縄攻略を企圖せんとせば犠牲を最少限に喰止むる爲

にも我が特攻隊に海軍水上艦隊を事前に派遣する爲特殊の上陸方法を考案するの要あり

二、敵の九州及臺灣方面に對する空襲隊に沖縄本島に對する艦隊射撃の現況比較的低調なるは敵軍主力の本格的上陸進攻未だ切迫しあらざる體左にして現に慶良間列島に於ける敵の行動（一部は人員兵器資材糧秣等を揚陸し爾後の本格的上陸の泊地としての陸軍備をらん）は後方補給の長遠なる敵が上陸作戦に危氣なからしむる爲採用すべき當然の處置なり

三、沖縄に對する企圖は空海基地の推進にあるべく慶良間列島、船島の泊地に進し爾も豫想上陸地點たる北飛行場に近く爾後の上陸規模増大の爲にも將亦上陸用各種資材に糧秣等の集積準備等の爲にも其の價值甚大なり

而して之等の糧秣資材等は便りに墜沈せられたる場合に於ても人員の被害は微々たるものにして自然特攻對策となり得べし又基地の設定容易なる小島嶼を先づ占領し四月中旬以降開戦機

の進地を推進することゝ然無とは断じ難し
其の進展に活動中の機動部隊の本格的作戦準備位に敵後方の状
況等よりして前記既述方面に對する長期滲透的準備の充実等
とも關聯し四月中旬以降沖縄本島に對する本格的上陸を開始の
算大なるものと判断す

通電先 海 参考 参本、靖、球

第一期（自三月二十六日）
第二期（至四月十一日）
の戦況経過の概要

本國は三月二十六日第九飛行團をして敵第十七飛行隊を基幹
とする空襲を以て慶良間群島附近の敵機動部隊を攻撃せしめ
たるを皮切りとし空力を以て慶良本島及先島列島（特攻並に
軍偵隊の反復掃蕩）により一掃（九州に逐次集結せる特攻兵
力）を以て九州方面より（第一回特攻は三月二十七日）東西
相呼應して攻撃を開始し精鋭部隊に甚大なる損害を與へ其
の心膽を寒からしめた
次で四月一日敵は沖縄本島に對し本格的上陸を開始せしも我
が地上兵團の抵抗見るべきものなく而も第六航空軍及海軍航
空部隊主力未だ攻撃を開始するに至らざりしを以て敵上陸部
隊は何等の損害を蒙ることなく無血上陸に成功し忽ち沖縄北
中南飛行場は敵の占據する所となりしが第三十二軍に於ては
未だ反撃の模様なし

茲に於て師團は「此儘にして荏苒時日を経過せんか其に事よ
べき事無し立至るべき」は必致なりと判断し四月三日朝後の
作戦に關する師團の見解を別紙の如く方面軍に開陳すると共
に全般作戦の見地より第三十二軍の即時反撃の必要なる所以
を強調し意見を具申する所あり然るに其の後聞もなく第二十
二軍は獨自の立場より反撃を決意せる旨の電報及方面軍の第
三十二軍に對する反撃命令並に聯合特隊（第六航空軍）の四
月六日以後の本格的攻撃に關する通報に接したるを以て師團
は真意を辨して之に協力するに決し所要の部署を爲す（作命
甲第二百四十二號）と共に爾後の攻撃目標は第三十二軍より
の要求もあり主として大型艦艇に変更せり斯くて師團は聯合
特隊（第六航空軍）と協同し第三十二軍の反撃に密に策應し
て連續不絶の攻撃を履行せしも第三十二軍は間もなく反撃を
中止するに至りしを以て爾後師團は主として航空部隊獨自の
見地に海軍攻撃を實施するに至れり

第十方面軍參謀長

（參謀次長）

八飛師參電第一七五五號

一、沖繩島に對する上聯當初の戦果芳しからず遂に憂ふべき戦況に
立到らしめたるは師團の責任にして遂に申譯なし
二、併し乍ら現下の戦勢を觀察するに敵の兵力僅かに二師團内外に
過ぎず後方補給路亦長遠なるにも拘らず敵水上艦艇（空母を含
む）の損害甚大なるは憂ふべからざる事實にして上聯兵團の支
援に任ずべき海軍航空の根據未だ安定しあらざるは我の乘すべ
き好機なり

而して此の好機は旬日を出でずして去らんとす即ち上聯せる敵
を攻撃し沖繩北中飛行場の使用を拘束するは大局に於ける作戦
目的を達成すると共に敵に大出血を強要する爲経對の要件なり
師團は未だ兵力の半数以上を占有しあり情亦然るべし殊にして
此の機を逸せず遂で積極的攻勢を採らんか陸海空戦力發揮の好

機亦生起繼續して戦局の打開必ずしも不可能に非ざるべし
 球と雖も此の戦機を捕捉することなく易々として眼前に敵航空
 要塞の建設を許し神州を隄翼の蹂躪に委じ自ら沖縄の一端に在
 在するも瓦全の他何等の意義を有せず
 萬一戦局打開に到らずとするも玉碎に至る間少くも數ヶ月我が
 各種戦力發揮の機會を作爲するを得て敵に大出血強要し國體護
 持に寄與する所極めて大なるべし
 航空作戦の見地に基き戦機を逸せんことを虞れ右敢て意見を開
 陳す

通電先

海

参考

参本

2 各部隊の戦術経過

1、第九飛行團

(1) 第九飛行團は二月中旬以降先島群島に展開し作戦準備中
 なりしが敵進攻の企圖明瞭となるや飛作命甲第二百十
 一號により新に飛行第二十四戰隊號第四百十五、第四百十六
 飛行隊獨立飛行第四十一中隊を其の指揮下に入らしめら
 る(三月二十五日發令)當時に於ける軍隊區分(括弧内
 は展開地)左の如し

第九飛行團

長 柳 本 大 佐

第九飛行團司令部 (石垣)

飛行第二十四戰隊 (宮古)

獨立飛行第二十三中隊 (石垣)

獨立飛行第四十一中隊 (宮古)

號第十七 飛行隊 (石垣)

- 隊第三十一飛行隊 (石垣) 展開の豫定あり
- 隊第三十九飛行隊 (宮古) しも九州より直
- 隊第四十飛行隊 (宮古) 接符攻せり
- 隊第四十一飛行隊 (石垣)
- 隊第四百十五飛行隊 (宮古)
- 隊第四百十六飛行隊 (宮古)
- 第六十九飛行場大隊 (石垣)
- 第二百五飛行場大隊 (宮古)
- 第二百二十八飛行場設定隊 (宮古)
- 第二獨立整備隊 (石垣)
- 第十四戰術修通班 (石垣)
- 隊第一整備隊 (沖縄)

(四) 三月二十六日飛行隊は該第十七飛行隊を基幹とする部隊の敵機動部隊攻撃を遂初とし四月一日頃迄に三四に亘り沖縄西方海面の敵艦船に對し攻撃を實施し爾後引續き新

に配属せられたる飛行第十七、第十九、第二百五戰隊の轉攻隊を以て沖縄周辺の敵艦送船團に連續攻撃を實施すると共に選抜せる一部の兵力を以て夜間爆撃を反復し多大の戦果を収めたり

四月五日球兵團の反擊に聯合艦隊の總攻撃に策應して壹間強襲を準備すべし師團命令に基き飛行第二十四、第二百五戰隊をして所要の準備を整へしむると共に主力を以て依然沖縄方面に對する黎明夜間爆撃の攻撃を續行す

(三) 此頃先島群島の飛行場に對する敵の攻撃は漸く頻繁となりしが飛行團長は地上兵團の協力を得ると共に指揮下諸隊を奇襲し飛行場の修復を強行して其の機能の確保に勉め以て離陸直轄たる他の飛行部隊をして宮古及石垣飛行場を中継基地として使用するに支障なからしめたり

(二) 本期間に於ける第九飛行隊攻撃状況(成果)別表第一の如し

2、第二十二飛行團

(イ) 飛行團は作戦開始以來主として第二線部隊として開闢部隊の編成訓練等に任じつゝありしが沖縄方面に對する攻撃の進展に伴ひ三月二十八日飛行第十九隊隊を石垣に於て又四月五日飛行第十九隊隊を宜蘭（最初は石垣の豫定たりしも宜蘭に變更せしめたり）に於て夫々第九飛行團長の指揮下に入らしめらるゝと共に四月一日獨立飛行第四十七中隊を師團直轄として抽出せらる

(ロ) 四月十日南那覇方面に對する状態の變化に對應する爲新に號第三百十七及同第三百十八飛行隊を夫々臺東及潮州に於て飛行團の指揮下に入らしめられ敵艦隊に對する隨時の攻撃を準備す

3、九州方面より投入せる特攻部隊の戦歴経過

(1) 西參謀の特攻隊の掌握及推進

西參謀は「特別攻撃隊の掌握並に臺灣に向ふ前進を指導すべき任務」を受け三月十六日新田原に到着し二十五日頃迄に左記の如く部隊を掌握し轉進を準備中敵機作命甲第二百十三號其の二を受領す

左記

- 號第三十三飛行隊
 - 號第三十四飛行隊
 - 號第三十五飛行隊
 - 號第三十六飛行隊
 - 號第三十七飛行隊
 - 號第三十八飛行隊
 - 號第三十二飛行隊
 - 號第三十九飛行隊
 - 號第四十飛行隊
 - 號第四十一飛行隊
- 太刀洗
 雁の巢
 熊本（陸軍）
 知寛
 新田原

茲に於て先づ敵第三十二飛行隊を二十五日夕次で敵第四十一飛行隊を三月二十八日夫と沖繩（中）飛行場に向進し神參謀の指揮下に入らしむ

更に三月二十九日敵第三十九飛行隊を沖繩に向ひ前進せしめたるも同隊は徳之島に不時着し爾後第六航空軍隊下第六飛行團長の指揮を受け沖繩方面の攻戦に任ず

三月二十七日師團より別紙の如き電報命令に接したるを以て特攻隊の臺灣への轉進を指導すると共に第六航空軍との連絡に勉め太刀洗及瀧岡等を巡回して九州より沖繩への直接攻戦の爲必要なる特攻機の増槽並に臺灣向飛行機の空輸に關し關係部隊と交渉す

次で三月三十一日瀧澤參謀新田原到着と共に其の任務を同參謀に申繼ぎ四月三日出發する迄瀧澤參謀を援助す

(四) 神參謀の特攻隊を以てする艦船攻戦

神參謀は第三十二軍參謀兼第八飛行師團參謀として沖繩

に在りしが艦飛作命甲第二百十三號其の二に基き逐次到着する特攻隊を指揮し別表第二の如く攻戦し精銳勇噴甚大なる戦果を收め敵の心膽を寒からしめたり

(五) 瀧澤參謀の特攻隊を以てする艦船攻戦

瀧澤參謀は艦飛作命甲第二百二十號に基き三月三十一日新田原に到着し西參謀の任務を繼承す

當時沖繩各飛行場及徳之島飛行場に對する敵機の攻戦は漸次熾烈となり徳之島を中繼し又は沖繩飛行場に特攻隊を推進したる後行ふ艦船攻戦は不運となれるを以て瀧澤參謀は從來の如く在九州特攻隊を神參謀の指揮下に入らしむることなく直接新田原より攻戦せしむるを有利なりと判断し爾後の攻戦は専ら九州より直接實施する如く指導せり

斯くて諸隊は四月一日、三日、六日の三次に亘り攻戦を實施し別表第二の如く偉大なる戦果を收めたり

次で福澤參謀は或第三十三飛行隊の全力を九州より塔邊に導進せしむると共に師團命令に共き四月十日を以て在九州特攻隊司令部の人員器材を第六航空軍に導進したる後臺灣に歸還せり

4、其の他の師團直轄飛行部隊

(1) 飛行第十戰隊

三月二十五日沖縄群島周邊に三群の機動部隊を捕捉せし以來屢々沖縄方面に出動し精銳勢偵に於ける師團の攻進を容易ならしむ

又四月一日早朝北、中飛行場正面に對する敵の本格的上陸に方りては速早く其の企圖を明らかにし各隊の戦闘指揮に資すると共に爾後連續的に出動して沖縄本島周邊の空海状況を明かにし著しく師團の攻進を容易ならしめた

(2) 獨立飛行中隊（軍偵）の状況

獨立飛行第四十七、第四十八、第四十九中隊は作戰開始と共に屢々沖縄周邊の艦艇に出動し敵艦艇の攻撃（反復掃蕩）特別攻撃隊の誘導班に觀察補助、搜索等各種の任務に服し常に偉大なる戦果を収め精銳勢偵敵の心膽を寒

からしめたる要甚大なり
其の攻進状況（戦果）別表第三の如し

別紙

西参謀は逐次到着する特攻隊を左の如く處置すべし
一、敵第三十一、第三十三乃至第三十五、第三十九飛行隊は通常な
る勝算ありは上海經由にて臺北に前進せしめ其の他は津幕を
利用し沖縄（中又は北）又は徳之島飛行場に前進して神参謀の
指揮下に入らしむべし
若し氣象状況敵情等の關係上沖縄（徳之島）への前進困難なる
時は中北部九州に於て待機せしむべし
二、一般の戦況氣象等の關係上南島九州より直接攻進するを有利な
りと確信せば前項に拘らず獨断部署することを躊躇すべからず

月	日	目	部	兵	力	戰	果	損	害
三	二六	豐良間群島 周邊の敵機 動部隊に對 する拂曉攻	敵17F	特攻 偵察機 六機	三機 六機 二機	大型A一機 運破沈	未歸還 敵十七飛行隊 四機		
三	二八	油尾三島 三島本島 三島四島 三島群島 に對する夜	敵17F 41FOS	特攻 偵察機 三機	二機	戰果不明 爆彈不發 A一 二突入を報	未歸還 一機		
三	二九	沖繩周邊敵 艦隊に對す る拂曉攻撃	41FOS	偵察機 二機	二機	大型一機 直破大破 大型一機 直破大破 別機夜間機 機索實施			
四	一	慶良間附近 艦隊に對す る拂曉攻撃	24FR 41FOS 17FR	偵察機 二機 三機	中運丁 一快上 大火柱 二 黒煙 二	戰果不明	未歸還 八機		
四	二	中飛行場西 方海面敵機 の拂曉攻撃	105FR 41FOS	特攻 偵察機 九機 十一機	中運丁はD中破二 機	未歸還 一機			
四	三	中飛行場西 方海面敵機 の拂曉攻撃	24FR 41FOS 114F	偵察機 二機 八機	第一次0六0直 三機運攻 第二次一九0七 機運攻 第三次二〇〇 機運攻 第四次二〇〇 機運攻 第五次二〇〇 機運攻 第六次二〇〇 機運攻 第七次二〇〇 機運攻 第八次二〇〇 機運攻 第九次二〇〇 機運攻 第十次二〇〇 機運攻	未歸還 特攻 八機 偵察機 二機			
四	四	強波陣西 方海面敵機 の拂曉攻撃	105FR	特攻 偵察機 八機	〇又爆彈發射 〇又爆彈發射 不詳 一隻 運破 黒煙 二	未歸還 特攻 一機 偵察機 二機			
四	八	中城灣内の 敵艦隊夜間 拂曉攻撃	17F 48FOS	偵察機 二機	〇一 大破炎上 大型船 一運破炎上 上(不確實) 一機	未歸還 特攻 一機 偵察機 二機			

九日 十四日 百十五機	四一	四九	四八	四三	及海軍攻撃
	同右	中城灣北中 飛行場西方 海面船隻 攻撃	中城灣慶良 間湾内の船 隻に對する 攻撃	中城湾内の 敵艦船夜間 拂曉攻撃	残波岬西方 海面大型船 隻に對する 拂曉攻撃
	10FR	105FR	105FR	17F 48FC5	105FR
	三戰 特攻 直掩 五機	三戰 特攻 直掩 四機	三戰 特攻 二機	軍偵 爆撃 特攻 一機	三戰 特攻 爆撃 直掩 四機
	○ 命中中大破失 上其の値不詳 一機定の如く攻撃 入電	○ 結果不詳	○ 結果不詳	○ 一機沈 上(不確實)	○ 又は一隻沈 ○ 又は一隻沈 不詳 一隻 爆撃 黒煙 二
A 確沈確實 一 不確實 三 B 確沈 二 ○ 確沈又は爆撃 一 爆撃	未歸還 特攻 直掩 二機	未歸還 特攻 直掩 二機	未歸還 特攻 爆撃 一機	未歸還 特攻 爆撃 一機	第二次一九〇〇七 爆撃 B 二機 大丁

大塚▲一 野宮 未詳

別表第二

九州方面より投入せる特攻隊

九州(徳之島及沖縄を含む)方面より投入せる特攻部隊概況一覽表

月日	部隊	兵	飛行場	指揮官	戦果	備考
三二七	敵 沖繩西方 敵艦船	軍機 特攻九 偵察機 二機	沖縄中飛行場	神 参 隊	大型機五 轟沈 同右 五 轟破	直掩機(安齊機) 贈遺す
三二八	敵 那霸西方 敵艦船	軍機 特攻四 偵察機 二機	同 右	同 右	中型機三 轟沈 同右 一 失墜 (黒煙二)	特攻機の内一機は第三十二軍第一九航空地区司令部所属のもの
三二九	敵 那霸西方 敵艦船	出内 九機 四機 不慮は	同 右	同 右	中型機三 轟沈 同右 一 失墜	一機は戦果確認後贈遺す
三一	敵 沖繩西方 敵艦船	一式機 特攻五	徳之島		不明	一機贈遺 (内一機は贈遺途中徳之島に於いてノランマンと交戦々死)
三	敵 沖繩西方 敵艦船	軍機 特攻六	同 右	同 右	不明	
六	敵 沖繩北中飛 行場西側海 面の敵艦	戦果 七機 一式機 二機	同 右	同 右	不明	特攻機一機沖水良部島に不時着 確成機は喜界島に贈遺

期日	中立派計八十四中				中立派計八十四中			
	三三〇	三三一	三三二	三三三	三三〇	三三一	三三二	三三三
日	三月三十一日	三月三十一日	三月三十一日	三月三十一日	三月三十一日	三月三十一日	三月三十一日	三月三十一日
目	海軍西で四十特新面海	八米島東面新面海	八米島東面新面海	八米島東面新面海	八米島東面新面海	八米島東面新面海	八米島東面新面海	八米島東面新面海
隊	三對	二對	二對	二對	二對	二對	二對	三對
果	無果不問	無果不問	大丁一	喜	日	日	日	大丁一
附	六	六	六	六	六	六	六	六
書	」	」	」	」	」	」	」	」

三第二期（自四月十二日）
 人戦間経過の概要

四月十二日早朝、群より成る敵機動部隊は北部臺灣に來襲せしを以て師團は一時沖縄方面に對する攻勢を中止し對機動部隊攻撃を準備（一部は實施す）せしむ。作命甲第二百五十號及同第二百五十一號（其の位置の捕捉困難にして遂に其の目的を達成する能はざりしが十三日夕に至り敵機動部隊は遠く宮古島南方海面に遷走せしを以て師團は再び沖縄方面に對する攻勢を開始す。

此頃宮古石垣方面に對する敵機の來襲漸く熾烈となり兩島の飛行場を使用して行ふ攻勢は漸次困難となりしを以て師團は極力先島列島基地の使用を制限すると共に各機種を増槽を圖り以て成るべく多くの兵力を以て臺灣より直接沖縄に對する攻勢を實施し得る如く準備せり斯くて四月末迄は攻勢極めて順調に進捗し大なる成果を收めたり。

此頃第三十二軍の地上戦況は芳しからず逐次首里北方高地線に壓迫せられつゝありて一般の志氣必ずしも昂揚しあらざるやに觀取せられんを以て師團は四月二十八日州紙の如き激勵電を發信す

次で四月三十日夜半左記の如き第三十二軍の壯烈なる反響の電報に接したるを以て師團は直ちに作命甲第二百九十號を下達し全力を揮つて第三十二軍の作戰に協力する如く部署す

左記

一、從來の網大なる航空協力を深謝す

軍は五月四日より北方に對し攻勢に轉ずるに決す就ては航空攻撃の目標を左の如く限定實施し軍の攻勢に直接協助力方に配慮あり度

(1) 二日、三日兩日「嘉手納」沖「中城灣」のB、Cをなし得ればDの徹底的掃蕩

(2) 攻撃開始前北、中飛行場の強度制壓

(3) 攻撃開始後も右に準じ直接的攻撃の持續

ニ、參考の爲攻勢構想の概要左の如し

(1) 主力はX日(四日と決定)黎明より右正面より攻撃に轉じ大規模なる煙の使用と相俟ちて晝夜連續北方に對し攻撃を續行し「普天間」東西の線に進出し敵第二十四軍團主力を殲滅す

(2) 有力なる海上挺進隊(約一〇〇〇名)三日夜行動を發起し東西兩海岸より敵の側背に投入主力の攻撃を容易ならしむ

(3) 三日夜正面關係部隊は此の際「切込隊」を侵入潛伏せしめ主力の突撃開始と共に俄然起つて敵の火砲、迫撃砲、機銃等を攻撃す

別紙

八飛師参電第二五一六號

(四月二十八日)

球 参 謀 長 殿

天候の恢復に伴ひ天一號航空作戦愈々たけなはならんとし我が精
銳の志氣衝天の概あり
切に貴軍の御健闘を祈る
尙當師團の戦力は逐次補強せられつゝあるを以て爾後逐次投入兵
力を増大し間接的に貴軍に對する協力を強化する考にして今後一
二ヶ月の作戦に支障なき戦力を保有しある様付爲念

通電先 球(灣)

2 各部隊の戦闘経過

一、第九飛行團

(1) 四月十二日來花港港東方洋上近距離に現出せる敵機動部隊に對する攻撃を準備せしも遂に之を捕捉するに至らざりしを以て飛行團は一部を以て之に對する攻撃を準備しつゝ主力を以て再び沖縄方面に對する攻撃を（四月十七日）開始す

之より先師團命令（敵作命甲第二五四號）に基き四月十四日獨立飛行第四十一乃至第四十三中隊並に敵第四百四同第四百十五飛行隊を飛行團長の指揮下に入らしめらる爾後飛行團は頻次に亘る空襲下克く地上兵團と協力し敵機の墜落を圖り損害の局限に勉むると共に連日飛行場の修復に任じつゝ月明と天候とに恵まれ四月中旬末より五月五日に亘る間連続不断的の攻撃を反復し敵に甚大なる損害を與へたるのみならず五月四日夜に於ける第三十二軍

の反撃に伴ふ逆上陸に方りては有効に之に協力し同部隊成功の基を作れり

其の攻撃状況（戦果）別表第一の如し

二、第二十二飛行團

第二十二飛行團は本期間逐次に兵力を抽出せられ僅かに飛行第十七戦隊、練習機の特攻隊二隊（敵第四百十七及同第四百十八飛行隊）及敵第十五飛行隊のみを掌握し隨時の戦闘を準備しつゝ訓練並に整備に任ず

三、師團直轄戦（中）隊

(1) 飛行第十戦隊

本期間飛行第十戦隊は主として沖縄周邊に於ける敵艦船の状況搜索に任じ特攻隊の攻撃目標選定上貢献せし所甚大なり

(2) 師團直轄各戦（中）隊は主として北部臺灣の基地を使用し四月末より五月上旬に亘る間月明と天候とに恵まれ別

別表第一

第二期 (自四月十二日 至五月五日)

一、第九飛行團の攻戦

月日	部隊	目 標	兵力	戦 果	損 害
四二五	飛行第五百五戦隊	花巻港東方洋上機動部隊攻撃 右機動部隊攻撃	特攻四機	一機の船艇発見せ るも詳細不明	特攻二機
四二三	獨立飛行第四十二 中隊	花巻港東方洋上敵機 動部隊攻撃	二機	〇	なし
四一七	獨立飛行第四十一 中隊	嘉手納沖大型艦攻撃	二機	中破 〇又はD一 大破 大丁一	なし
四一八	飛行第二十四戦隊	沖繩北飛行場攻撃	二機	不詳	なし
四二二	飛行第十九戦隊	沖繩西方海面 敵艦	直掩二機 誘導三機	GRAMAN一機撃墜	特攻二機
四二二	飛行第十九戦隊	首里西方海面の敵大 型艦	特攻六機 誘導一機	大破炎上 〇 大丁一	特攻四機
四二二	飛行第二十四戦隊	沖繩周邊敵艦	直掩一機	不詳	特攻一機
四二六	獨立飛行第四十三 中隊	慶良間北側敵艦	二機	大D一機沈略く確實な	なし
四二七	獨立飛行第四十一 中隊	慶良間沖敵艦	特攻二機	大破〇一 中丁一	特攻一機
四二八	飛行第五戦隊	慶良間沖敵艦	誘導二機	沈中丁一	特攻四機
四三〇	飛行第十九戦隊	慶良間沖敵艦	特攻五機	大破炎上 不詳	特攻一機
四五	飛行第十九戦隊	慶良間内敵艦	誘導一機	沈大丁一	特攻一機
四五	飛行第十九戦隊	慶良間内敵艦	特攻二機	不詳	特攻一機
四五	飛行第十九戦隊	嘉手納沖敵艦	特攻一機	大破	なし
四五	飛行第十九戦隊	嘉手納沖敵艦	特攻四機	炎上 不詳二	特攻四機
四五	飛行第十九戦隊	嘉手納沖敵艦	誘導一機	〇	特攻一機
四五	飛行第十九戦隊	嘉手納沖敵艦	二機	至近弾小艇艇	なし
四五	飛行第十九戦隊	嘉手納沖敵艦	一機	至近弾落水艇	なし
四五	飛行第十九戦隊	嘉手納西方敵艦	二機	中破 大丁	なし
四五	飛行第十九戦隊	嘉手納西方敵艦	大破 中丁	中丁	なし
四五	飛行第十九戦隊	嘉手納西方敵艦	五五機	GRAMAN三機撃墜	四五機

第一隊 (至五月五日) 自四月十二日

別表第二
三直轄部隊の攻歴

部隊	月日	目 標	兵 力	戦 果	損 害
飛行第十七隊	五 三	嘉手納沖敵艦船	特攻六機 誘導一機	火柱 五	特攻 五機 誘導 一機
飛行第二十隊	四 二二	制 空	特攻一〇機 誘導一機	グラマン四機撃墜 大型破炎上 〇 〇 一	特攻 一五機 誘導 一機
飛行第二十九隊	四 一六	嘉手納沖敵艦船	特攻一機 直掩一機	不 詳	特攻 一機 直掩 一機
飛行第二十九隊	四 二二	制 空	特攻六機 誘導一機	燃沈B又はO 一機上不明 一機沈機ね確實	特攻 五機
飛行第二十九隊	四 二七	嘉手納沖敵艦船	特攻五機 誘導一機	炎上 不詳 三	特攻 五機 誘導 一機
飛行第二十九隊	四 二八	慶良間東方敵艦船	特攻七機 誘導一機	機動部隊に突入を報ずるもの 二機	特攻 七機
飛行第二十六隊	四 二二	花津港東方洋上 機動部隊	特攻六機 誘導一機	不 明	特攻 二機
獨立飛行第二十隊	四 三〇	嘉手納沖敵艦船	特攻二機 誘導一機	燃 沈 〇 一	特攻 一機
			六一機	グラマン 一六隻 四機	三五機

其他の部隊の攻塵

部隊	月日	目	標	長	力	戦	果	損害
第九飛行隊	四二二	沖繩周邊敵艦船		特攻五機	特攻一機	火柱は〇に突入の算大なるも機		特攻五機
第十九飛行隊	四二八	久方敵艦船	島	特攻四機	特攻一機	艦沈B一 B又は〇一		特攻四機
第二十飛行隊	五四	嘉手納沖敵艦船		特攻三機	特攻一機	艦沈 不詳一		特攻三機
				一五機		炎上 不詳一	十隻	特攻一機

第三期（自五月六日）
戦間経過の概要

部隊は五月上旬迄の作戦に於て戦力の大部を消耗すると共に
 師團自隊に於て連續二ヶ月に亘り無運なる特攻隊を相次で編
 成したるのみならず飛行機亦整備の要大なる状態となり加ふ
 るに先島諸島の使用逐次制扼せらるゝに至りたるを以て五月
 上中旬の俟師團は主として部隊の態勢整理並に飛行機の整備
 を行ふに決し先づ第九飛行隊の主力を臺灣本島に招致すると
 共に新に配属せられたる特攻隊を加へ第二十二飛行隊を強化
 して兩飛行隊を併列して攻塵を實施せしむるに決し所帯の命
 令（敵作命甲第三百二十號乃至同第三百二十八號同第三百三
 十一號）を下達し着々五月中旬末以降の作戦を準備す
 此の間第五航空軍より轉属せられたる隊第二十五（九九双）
 同第二十八（九九雙）同第七十一（九九雙）各飛行隊逐次到
 着せり

師團は之を直轄とし、第二十八師第七十一飛行隊は編成擔任部隊を同しくし、且該第七十一飛行隊長以下の能力等に鑑み、第二十八飛行隊長をして統一指揮せしめ、下旬月明期に於ける作戦を準備せしむ斯くて、師團は態勢整理（飛行機整備）完了と共に一部を以て十七日主力を以て十八日沖繩方面に對する攻進を再興せしが、偶く五月二十一日以降天候不良の爲攻進意の如くならず、遂しく月末となる。

此の間第六航空軍に於ては五月二十四日機動作戦（沖繩北及中飛行場に對する強行着陸攻進）を實施せしも、天候不良の爲師團は遂に之に協力する能はざりしのみならず、其の成果を直ちに活用し得ざりしは返へす返へすも遺憾なり。

次で五月三十日天候の一時的恢復を待ちて一部の攻進を實施し、更に六月五日及六日の兩日に亘り相當の兵力を投入して沖繩方面の敵艦艇を攻進中月明期に入る。

2 各部隊の戦況経過

一、第九飛行團は一部を以て好機に乗ずる攻進を續行しつゝ、主力を以て十五日以降の攻進を準備しつゝありしが、五月十日師團命令（敵作命甲第三百二十號）に基き、五月中旬以降宮古及石垣に展開中の飛行部隊を逐次臺灣本島に轉進せしむると共に、飛行團司令部は五月十五日宜蘭に移轉を完了す。

五月十四日飛行團は師團命令（敵作命甲第三百三十一號）に依り爾後の攻進要領を明示せられしを以て之に基き作戦を準備し、五月十八日以降沖繩方面に對する攻進を再興せしむも、天候不良の爲攻進意の如くならずして遂に月明期を迎ふるに至る。

其の攻進状況（戦果）別表第一の如し

二、第二十二飛行團

第二十二飛行團は五月十三日新に飛行第十七、第二十六、同第二十四部隊、獨立飛行第二十三及同第四十八中隊を其の指揮下に入らしめられ、五月十七日以降沖繩方面に對する

攻遷を準備すべき師團命令（誠作命甲第三百二十八號）に
基き直ちに所要の準備を整へ五月十七日以降攻遷を開始せ
しが天候不良の爲攻遷意の如くならず六月上旬迄に備かに
四回の攻遷を実施せるに過ぎず

其の攻遷状況（戦果）別表第二の如し

三其の他の師團直轄戦（中）隊

(1) 飛行第十戦隊

戦隊は長期間に亘る連続不斷の出動と飛行機の更新なき
爲其の出動率著しく低下し本期間に於ては遺憾ながら十
分なる活動を實施せず

(2) 其の他の部隊の攻遷状況（戦果）別表第三の如し

五 第四期（自六月二十七日
至六月二十日）

五月末以來の沖繩方面の戦況は愈々最後の段階に近づきつゝあ
るを豫察するに至りしが之に反し宮古島及石垣島方面に對する
敵の動向は漸次活潑となり近く敵の該方面に對する進攻の算大

なりと判断せらるゝ後後顯著となりしを以て師團は六月上旬
間期に入ると共に沖繩方面に對する攻遷を中止し爾後の作戦に
即應する如く専ら整備に勉め一意戦力の充實を圖り次期作戦準
備に専念中六月二十日第三十二軍は最後の増突遷を決定し茲に
沖繩本島に於ける地上兵團の組織的抵抗を終るに至れり

附表第一 第三期（自五月六日）
一、第九飛行團の攻墜

月日	部隊	目標	兵力	戦果	損耗
五九	飛行第二十戦隊	制空	六機	目的達成	なし
五二二	飛行第二十戦隊	制空	八機	目的達成	なし
五二三	飛行第二十戦隊	制空	八機	目的達成	なし
五一七	飛行第十九戦隊	制空	三機	目的達成	なし
五一七	飛行第二十戦隊	制空	四機	目的達成	なし
五一八	飛行百五戦隊	制空	四機	目的達成	なし
五一八	飛行第十九戦隊	嘉手納沖敵艦船	特攻四機 誘導一機	不詳	特攻三機
五二一	飛行百五戦隊	制空	四機	目的達成	なし
五二一	飛行第十九戦隊	摩良間嘉手納中 間西進中のB0	特攻五機 誘導一機	大破大破艦二	特攻三機
五二九	飛行第二十戦隊	沖繩西方海面敵 艦船	特攻四機 誘導一機	途中より引返す	なし
五二九	飛行百五戦隊	制空	二機	目的達成	なし
五二九	飛行第二十戦隊	沖繩周邊敵艦船	特攻五機 誘導一機	不詳	特攻五機
六一	飛行第二十戦隊	制空	四機	目的達成	なし
六一	飛行第二十戦隊	嘉手納沖敵艦船	特攻二機 誘導二機	不詳	特攻二機
六六	飛行第二十四戦隊	制空	三機	目的達成	なし
六六	飛行第二十四戦隊	制空	七二機	二隻	一三機

四軍偵中隊の攻撃

部隊	月日	目	兵力	戦果	損害
獨立飛行第四十九中隊	五三〇	沖繩西方海面敵船	三機	至近中丁	なし
獨立飛行第四十九中隊	六五	慶良間西方敵船	一機	途中より引返す	なし
獨立飛行第四十九中隊	五三〇	慶良間西方敵船	一機	至近中丁	なし
獨立飛行第四十九中隊	五三〇	慶良間西方敵船	一機	至近中丁	なし

五軍偵中隊の攻撃

部隊	月日	目	兵力	戦果	損害
飛行第二十六中隊	五二七	慶良間東方敵船	特攻四機 直掩一機	至近中丁	なし
飛行第二十中隊	六六	慶良間西方一〇乃至十五隻の敵船	特攻五機 誘導一機	火柱	特攻四機
飛行第三十三中隊	五九	沖繩西方海面敵船	特攻四機 誘導一機	至近中丁	特攻一機
飛行第三十四中隊	六六	慶良間沖敵船	特攻四機	目標上空に到着を報ず	特攻四機
飛行第三十五中隊	五三一	沖繩西方海面敵船	特攻四機 誘導一機	途中より引返す	なし
飛行第二十九中隊	五二一	沖繩西方海面敵船	特攻四機	突入確實	特攻四機
飛行第二十九中隊	五二〇	沖繩西方海面敵船	特攻四機 七機	途中より引返す	なし
飛行第二十九中隊	五九	沖繩西方海面敵船	四機	目的達成	なし

其の他の部隊の攻撃

部隊	月 日	目 標	兵 力	戦 果	損 害
第三十飛行隊	五 一三	沖縄周邊 敵艦船	特攻五機 誘導一機	不 詳	特攻三機 誘導一機
第三十飛行隊	五 一七	慶良間東 側敵艦船	特攻三機	不 詳 空母に突入を報ず るもの二機	特攻二機
第二百十飛行隊	五 二二	沖縄周邊 敵艦船	特攻五機	大破 不詳 （内一隻沈没の算大）	特攻三機
			一四機	大破 不詳 （内一隻沈没の算大）	九機

第五 戦闘後に於ける彼我形勢の概要

一、沖縄方面の状況

師團の攻撃中止後海軍及第六航空軍は尙引續き一部の攻撃を續行中なりしが六月十八日來敵は八重瀬ヶ岳（首里南方約十軒）を突破し強引に我が主陣地帯に浸透し來り二十日朝來第三十二軍は各據點に兵力を集結し最後の抵抗を試みんも敵の猛攻遂に抗じ難く六月二十日夜半軍は主力を以て猛反撃を實施し茲に組織的抵抗を終れり斯くて敵は逐次沖縄本島及其の周邊諸島嶼に對する機動作戦を開始し沖縄北、中飛行場を中核とする大空軍基地の本格的設定に着手すると共に基地の實用化に狂奔するに至れり

六月二十日頃迄於ける沖縄方面の敵情附圖第三の如し

二、我が航空部隊の状況

我が航空部隊は開戦以來敵艦船に甚大なる損害を與へたるも約三ヶ月に亘る連綿不斷の兵力投入の爲戦力の消耗亦尠からず

本土方面の陸海軍航空部隊就中第六航空軍に於ても六月中旬頃
東遷次兵力の投入を抑制して次期作戦に備ふるに至れり
之より先師團は六月上旬の攻強を以て一應沖縄方面に對する本
格的作戦を中止し直ちに次期作戦（主として敵の宮古島方面に
對する上陸進攻を對象とす）に備へつゝ戦力の充實に努む
六月上旬師團の沖縄方面に對する作戦中止時に於ける部隊の態
勢並に我が戦力の状況附圖第四其の一乃至其の三の如し

第六 今次作戦（戦間）に於ける戦訓

其の一 今次作戦の失敗に關する反省と將來の教訓

一、緒言

今次作戦の経緯を回顧し其の失敗の原因を反省する時幾多の貴
重なる教訓を得るも之を一瞥して掩へは「眞の意味に於ける作
戦計畫の樹立なかりし」に歸着すと云ふも過言に非ざるべし
即ち第三十二軍及第十方面軍に於ては夫々自己の立場に於ける
作戦計畫は樹立せられありしを以て一瞬其の形式は整ひありた
るも其の實質に於ては何れも陸海戦力乃至は空地戦力の統合發
揮に於て全くの骨抜きにして殆ど其の根本に觸れたる實績を見
ず又大本營に於て東支那海周邊地域に於ける航空作戦指揮要領
に關する大帥命發令せられたるも空地陸海の統合戦力の發揮に
關する計畫及實施に於て缺くる所尠からざるものありしのみな
らず今次作戦に於て最も重要なる「沖縄決戦」の腹を決むるの
勇斷に缺け之が爲事前の施策悉く消極退嬰「第一練交せ」に隨

し空地陸海戦力の統合發揮を誤らしむるの最大原因を作れり
以下特に作戦（作戦準備）上の重要問題に關し若干の觀察を試
みんとす

三 飛行師團の側面的觀察に基く觀察

ノ決戦思想（必勝の信念）の缺如

長期に亘る敗戦は統帥部の墮落を來し不知不識の間隙思想
は敗戦防壁のとなり作戦を消極退嬰に導くのみならず網へず
濺刺積極的に戦機を捕捉するの氣力を失ふに至る
今次沖繩作戦に於ても其の例に洩れず上は帷幄の任に在る中
央幕僚より下は第一線部隊に至る迄敗戦の影響を受けたる所
甚大なり 蓋し沖繩作戦開始前に於ては大本營の腹も悉らく
沖繩作戦を一種の持久戦と見做し作戦を準備せられたるもの
と思惟するも是抑く今次作戦を失敗に導きたる重大原因と言
はざるべからず

即ち掩護作戦以來中央並に比島方面作戦部隊の行動を側面的

に觀察しつゝありし師團の印象は沖繩を持久戦とせる思想の
根本にはレイテ作戦の反動心理換言せばレイテ方面に對し過
度に兵力を投入せる結果北那比島の防禦力を弱化せしむるに
至りたる戦例を以て其の儘本土作戦の教訓として引用せんと
し「沖繩に過度の兵力を投入するは危険にして先づ速かに本
土を堅めざるべからず」と懸念せる受動的考へ方に抑く其の
端を盡し勝つべき雄策を怠りたるものと断ぜざるべからず
抑く米軍が本土に上陸を決行せんが爲には是れなる空軍基地
特に空軍基地の推進を絕對に必要とし比島の夫と本土の夫と
は作戦の實體と接相とに於て全然其の趣を異にするは火を斷
るよりも明かにして沖繩に投入する戦力は如何に巨大となる
も本土防禦の爲にプラス戦力とはなりても決してマイナスと
はならざるのみならず本土の安全は沖繩の確保を前提とすべ
きを以て各種の有利なる條件を有する沖繩作戦に於ては當然
國軍の主力を増する處の積極的作戦を指導すべかりしなり

第一線地上兵團に於ける防禦の思想亦長期に亘る敗戦の餘弊に浸潤し當初より全然水際決戦思想を放棄し兵力の結集を期り長く滞在せんとする思想濃厚なりしを以て一般に攻勢の氣力に乏しく戦力は豫想以上に脆かりしを歎かざるを得ず
今次沖繩作戰に於て若しも上は中央より下は第一線將兵に至る迄當初より斷呼たる決戦思想を以て作戰に臨みたらんには左記諸件の如き重要問題は必然的に事前に處理せられ第一線將兵の士氣亦大いに昂り沖繩作戰をして必ずや光輝ある勝利に導き得たるものと確信す

左記

- (A) 沖繩本島及伊江島に對する守備兵力の増強並に裝備の充實
- (B) 空地の統合戦力發揮の爲の具體的問題の解決(第三十二軍の防禦方針の修正配備の變更及反送要領の確定等)
- (C) 陸海統合戦力發揮特に海軍水上艦隊主力の投入要領及其の時機及投入時に於ける陸海軍航空部隊の協力要領

2 航空戦力の實力に對する正論なる認識の缺如

レイテに於ける捷一號航空作戰の失敗は夫以前に於ける各種航空作戰の失敗と共に所謂航空を知らざる「素人」をして「航空持むる足らず」との誤れる先入感を懐かしむるに至れり
而して此の先入感たるや蓋しては沖繩決戦思想の放棄となり或は空地同陸海戦力統合問題を懸念し地上兵團獨力防禦思想の醸成を促し間接的に今次敗戦の空因を爲すに至れり抑くレイテの航空作戰は「敗るべくして敗れたるもの」にして其の原因は一にして足らずと雖も其の大部分は航空作戰の致命傷とも稱すべき準備なき(通信情報網及飛行場準備の不備要領力の缺如、飛行機の分散秘匿施設の皆無器材準備特に飛行機整備の不良地上準備の整はざる航空大部隊の長距離急進機動等航空作戰準備上特に思ひべき過失の累積なり)航空作戰を指導せんとせし所に存し決して航空の無力を實踐するものにて非ざりして拘らず之に氣付く所渺たかりしを遺憾とす

之に反し今次沖繩作戰に於ては某程度の航空威力を發揮せし
を以て島嶼防衛に於ける航空の實力を「素人」に認識せしむ
る爲には頗好の良戦例となれるものと確信す

3 島嶼防衛作戰に於ける空地戦力の統合發揮に就て島嶼防衛作
戦に於ける航空戦力の地位に就ては今更實言を要せざるも制
空權を敵に奪ね水上艦隊無なる國軍今後の作戰に於ては空
地戦力の統合發揮を十全ならしめ以て最も有効に戦力を發揮
すること極めて重要なり

以下今次作戰より得たる若干の教訓を述ぶ

(1) 地上兵團等に参謀の近代戰況中航空作戰に關する認識を劃
期的に向上するを要す

今次作戰に於ける球兵團は近代戰を理解せず航空に對する
認識を缺きたる爲防禦の方針並に戰闘指揮を誤り大本營の
業務は沖繩作戰に發揮し得べき我が航空威力を至當に認識
する所なかりしと沖繩に推進する敵側の航空戦力の認識に

缺如せる所ありし爲戰局挽回の重要戰機を逸せり

(2) 地上兵團は我が航空基地を最後迄確保せざるべからず其に
止むを得ざる場合に於ても之を敵手に委すべからず此の思
想に缺如せる爲球兵團に對する今次航空作戰が如何に困難
にして且つ不運率のなりしかは萬人等しく之を感むる所な
るべし

(3) 航空戦力の發揮には一定の期間を必要とす

航空戦力は氣象月動彼我航空力の照隔飛行場施設我が練度
等各種の條件に依り變化すべきものにして不安定戦力たる
の短所を有するのみならず同時に投入し得る兵力には自ら
限度あり

従つて之等の諸條件に關せらるゝことなく安定せる戦力を
發揮せんが爲には一定限度の期間を與ふること絕對に必要
なり

而して其の期間は月節天候等を考慮し最小限一ヶ月と見積

らざるべからず

(二)地上兵團の防禦は水際戦闘に徹底せる獨力戦闘を本則とせざるべからず

空地兩戦力を有効に統合發揮せんが爲には敵の上陸前に主として航空部隊を以て之を洋上に離滅するは最も希望する所なるも洋上に於て敵船團を捕捉攻殲するは技術上至難の業に屬するのみならず泊地進入後と雖も天候夜暗等の爲攻難困難なること屢くなり

註 夜間の觸接等に依り適時泊地進入を偵知して翌黎明其の泊地に特攻を行ふは通常困難なり

故に地上兵團には豫想する敵兵力に對し某期間(少くも二ヶ月)に亘り獨力戦闘可能なる兵力を當初より充當すると共に守備は飽く迄獨立を以てする水際戦闘に徹底し從ひ當初航空の協力に缺きたる場合に於ても十分敵と對戦し得る兵力を第一線に展開し以て敵を不利なる態勢に於て水際に

「釘着」とし航空戦力發揮の期間を成るべく長からしむる着意を必要とす

地上兵團が敵上陸の當初に於ける戦力の不足を航空部隊に依存せんとし第一線の兵力を減じ從價戦力を保持せんとする思想は第一線兵團の水際決戦の銳鋒を弱化せしむるものにして禁物なり

今次球兵團の守備は遺憾ながら本戦例の楚例なり

(三)陸軍射撃部隊は地上兵團の爲最大の敵なるを以て航空は有

力部隊を以て之を制壓せざるべからず

敵が一度上陸せば之に對する地上兵團の反應は困難(又は不可能)なりとする思想は敗戦思想より發せる錯覺なり
サイパン碓方島等全然我が航空戦力を發揮すること能はざりし戦例は別問題とするも苟も我が航空(特に特攻)の威力圏内に在る敵に對しては黎明薄暮夜間等を利用しては難く制壓殲敵に在る場合と雖も我が反應を最も妨害する敵の態

砲射撃部隊を封鎖することは敢へて困難に非ざるを以て地上兵團は夜間を利用し敵上陸の直後襲撃未だ整はざるに乘じ精突果敢なる反撃を實施し航空部隊の奮進で敵の砲射撃部隊を誘致して之を殲滅するの機会を作爲するの概なかるべからず

今次球兵團に對する砲射撃部隊に對する制壓は十分とは言ふ能はざりしも阿兵團の四月八日に於ける第一線大隊の反撃は完全に成功しあり

(2) 以上の見地に基き空地戦力の統合發揮の要領を白紙的に概略すれば左の如し

(1) 地上兵團には豫想敵兵力に對し少くも二ヶ月以上を完全
に守備し得るを目途として兵力裝備を充當し航空戦力の
如何に關せず獨力防禦に徹底す

註 斯くすることに依り航空の好目標は到る所に現出し
空地統合戦力は最大限に發揮せらる

(2) 航空は陸軍の状況之を許せば成る可く上陸當初の數日間
に主戦力を投入する如く使用するも敵上陸の時期(一ヶ月
期なるが月明期なるか)天候の可否等に依り航空戦力に
は著しき消長あるを以て航空戦力投入開始の時期を本則
として上陸第一日拂曉に決定し或は投入期間を過度に短
少ならしめて空地の協同を律するは大なる誤なり

彼我側空軍の懸隔大なる場合に於て特に然り

註 一日の中に幾何の特攻を投入し得るやは空として敵
の妨害に我が要道基地の施設及敵に依り定まれる
ものにして黎明攻撃等の場合に於ては一滑走距離概ね
六機程度を限度とすべく日中及薄暮の出勤は我が側
空軍なき場合に於ては通常困難にして最も有利なる
場合に於ても一日一滑走距離特攻一隊内外(夜間黎明
を除く)見て大なる誤なかるべし

又航空の攻撃目標は軍に輸送船のみならず有力なる部隊

を以て戦場の終結に及び敵の補給村落を完封すること極めて重要なり

各島嶼防衛作戰に於ける水上艦隊の價值に就て

今次作戰に於ては我が水上艦隊は遺憾ながら事前に敵に発見せらるゝ所となりて其の威力を發揮するに由なかりしも之を以て直ちに敵の制空權下に於ける水上艦隊の威力を過小評價するは危険なり

勿論長期に亘る敵の制空權下に於て我が水上艦隊を温存するは相當の難事に屬し事前に補給施設の施設を完備し其の稼働に成功せば本土防衛作戰に於ては距離の關係よりするも一夜機動の可能性あるを以て一部の艦艇と雖も夜暗を利用して敵の泊地に新込を敢行せば漸大なる價值を發揮するものと確信す

よ重要正副に於ける兵團の人事は作戰の勝敗を左右す

今次沖繩作戰に於ける地上兵團防禦方針の是正に就ては飛行部隊は勿論大本營に第十方面軍に於ても屢々現地軍に對して要求又は指導する所ありしも遂に之が實現を見ざりしは實に遺憾なり

而して其の因由する所亦極めて複雑なるものあるべきは推察に難からざるも斯くの如き重要事項を其儘にして放任せんか直ちに作戰に阻害を來さしむるは必然なるを以て此の種問題に就ては事無成生の當初に於て即時調整なる統帥權の行使を行ふと共に成るべく速に人事處置を之に伴はしむる如く所要の處置を講ずること極めて必要なり

各統型部隊独自の要綱

各統型部隊に特設要綱は周密なる計畫作戰ならざるべからず
統型作戰は前述の如く各種不安定なる要素を包含するを以て
各種の状況に即應し阻害無き作戦を實施せんが爲には事
前に於て各種各様の計畫を周密に立案検討し諸準備をして之

に併はしむること極めて緊要なり
蓋し制空権の争奪を許す程度の兵力を擁し固も鎮度亦優秀なる戦隊飛行団等を用用する場合に於ては自主的作戰の強要可能なるのみならず能ひ一時受動に陥りたる場合に於ても戰機に投ずる智謀巧妙なる運用により戰勢の挽回敢へて困難に非るも著しく劣勢なる航空部隊を以て固も主として特攻戦法を採用せんとせば勇ひ自主的作戰は程度に制扼せらるゝを以て效率的戦力の發揮は専ら準備の周到を待たざるべからざればなり

而して之等の準備中特に重要なるは兵力の温存故に各種機種（各戦隊）に應ずる飛行場の使用区分に關する周密なる計畫故に之に伴ふ飛行場施設にして之等各種の地上諸設備をして末端に至る迄始終一貫性を保持せしむること最も緊要なり之が爲少くも航空軍（獨立飛行團）に於ては運用に關する思想の統一を固り末端に至る迄之を徹底せしめ置くを要す

然らざれば作戰時一度情況の變化を來さんか忽ち折角の周密なる計畫をも破綻を生ぜしむるに至り戦力を低下するの重要原因を作るものとす

2 航空作戰準備

(4) 航空作戰準備の爲には幾ひ兵力なき場合に於ても必ず航空部隊の司令部を配置し作戰準備に専念せしむるの要あり
今次沖繩作戰に於て南西諸島方面に對する作戰準備は第八飛行團司令部が直接之を擔任實施せしも師團司令部は天一號乃至三號作戰を擔任し且つ幕僚隊實働にして沖繩に對する作戰準備北手の行届かざる状況なり
作戰開始前既に中央にも意思を具申せる如く他の司令部を沖繩に配置しありしならんには作戰準備上益する所大なるものありたりと思料せらる
其の意味に於て在沖繩第二十五飛行團司令部を昨年十月抽出せしは大なる失敗なり

④ 基地の施設

基地施設上特に留意すべき件左の如し
一 施設は速大なる計畫の下に當初より最大規模を以て着手すべし

今次作戦に於ても飛行機の到着掩蔽の構築、滑走路及勝
導路等に對する砂利の大量集積及敷設等に就ては昨年七
月頃以來準備せられありしも地上兵團の作戦準備等もあ
り糧食量と勞力資材等の制限を受け其の都度取極に遇る
ことを成れ「小刻み」の作業に甘んじ速大なる計畫を
中途に於て放棄し或ひは中止せし爲遂に所望の域に到達
せず

敵進攻時機の判断困難なる場合に於ては目前の作戦準備
に迫はれ屢々斯くの如き過失を冒すことあり嚴に注意の
要あり

二 特攻隊の發進基地は幅員を最小限一〇〇米とし且つ其の

兩側地區は少くも各一〇〇米内外の整地帯を必要とす
三 勝導路及滑走路は降雨の際に於ても使用可能なる如く素
質の向上を必要とす

⑤ 基地準備と地上兵團の作戦準備との相互調整今次作戦準備
間に於ては基地準備は専ら第十方面軍に依存し概ね其の目
的を達成せしも戦況逼迫するに伴ひ地上兵團の作戦準備と
航空作戦準備とは兩立せざるに及び相當の周着を起せり將
來上級司令部に於ては航空作戦に使用し得る兵力と其の地
位とに假み大局的に戦力を大ならしむる如く相互の調整を
圖ること肝要なり是雖も空地統合戦力發揮の基礎たるを以
て空従の關係は上級司令部に於て律すべき事項なるも地上
兵團の參謀は航空に對する認識不十分なること多きを以て
航空參謀は萬難を排し其の腹を替ふの概なかるべからず

3 航空部隊の運用に就て

① 奇襲は絶對的なり

優勢なる敵の制空下に於ても其の間隙を利用し又は黎明薄暮、夜間、天候氣象を利用せば容易に敵を奇襲すること可能にして従ひ昼間風度良好なる場合と雖も就高度の選定攻撃の方法等を工夫すると共に各種の欺騙行動を併用せば奇襲は確實に成立するのみならず其の成功率及我が損害は却て強襲よりも少なること多し

故に奇襲なる兵力を以てする攻撃は他くは奇襲を本則とせざるべからず

強襲實施の方法に就て

上陸防禦作戰に於て所々に應じ一時に就空大戦力を投入せんが爲強襲を敢行せざるべからざることあり

此の場合と雖も制空部隊を以て敵の戦闘機を撃破して特攻隊を投入せんとするは危険なり他くは奇襲攻撃の強襲に徹せざるべからず

即ち戦闘機は敵戦闘機との戦闘を避け他めて特攻隊の出動

及就戦闘之を掩護するに止め敵戦闘機に遭遇せば之を偵察

圖又は高々度に率領する等の方法或は我が戦闘機の過早の消滅を防止せざるべからず

我が戦闘機の補充十分ならざる場合に於て特に然り

一面の戦闘機と雖も上空を飛翔しあらば特攻隊の運送高度疎明せる態勢を以てする攻撃は可能なり

我が第一次上陸の際小艇舟艇を主體とする部隊を以て上陸を企圖する場合特攻の攻撃目標を之等の舟艇に指向せんとするは就空の特性（戦力の不安定性と効率上）上適當ならず

斯くの如き場合に於ては當初の上陸部隊は地上兵器を以て之を撃滅し得る如く配備を定め就空特攻の攻撃目標は依然としてLST級以上の輸送船又は大運搬艇に指向するを至常とす

蓋し上陸大兵團が上陸後大なる戦力を發揮せんが爲には小
型舟艇に引續き揚陸を開始する機多の大(中)一環船團の末
着に待たざるべからざるを以て之等の覆被は直接海上兵團
の反撃に成功せしむるの基となるものにして之亦所謂埋地
戦力の統合發揮の精神に合致せるものと謂ふべし

註 勿論之が爲上陸當初の好目標を指す不可なり
(二)戦法は創意せざるべからず

我が戦法に對する敵の對慮策に敵の兵器器材の變化に應
ずる攻撃法等を考慮し適宜戦法に創意を加へ敵の意表に出
づるは攻撃成功の基礎なり

殊に特攻戦法に於ては攻撃の時機進入の方向、接敵の方法

敵艦の位置等細部に亘り常に創意を果ねざるべからず

(例)背後よりする攻撃の價值

今次沖繩攻撃に於ては敵の警戒配備の重點は北方に向ひあ
りて臺灣方面よりする攻撃は恰も敵の背後より攻撃せるが

如き状況を呈せる爲九州方面に比し敵軍團の警戒少く固
も時々敵の有力艦隊(又は船團)は遠く鹿児島西方洋上に
離脱警戒せしことありしを以て屢く奇功を奏せるのみなら
ず其の損害は比較的少量なりを將攻撃に於ても背後より
する攻撃は常に有效なるを以て航空作戦に於ては地上戦團
の如き正面戦團に勝することなく常に有力部隊を以て背後
に襲ふの着意を必要とす

外其の他細部に亘る戦術測算の如し

附録第三

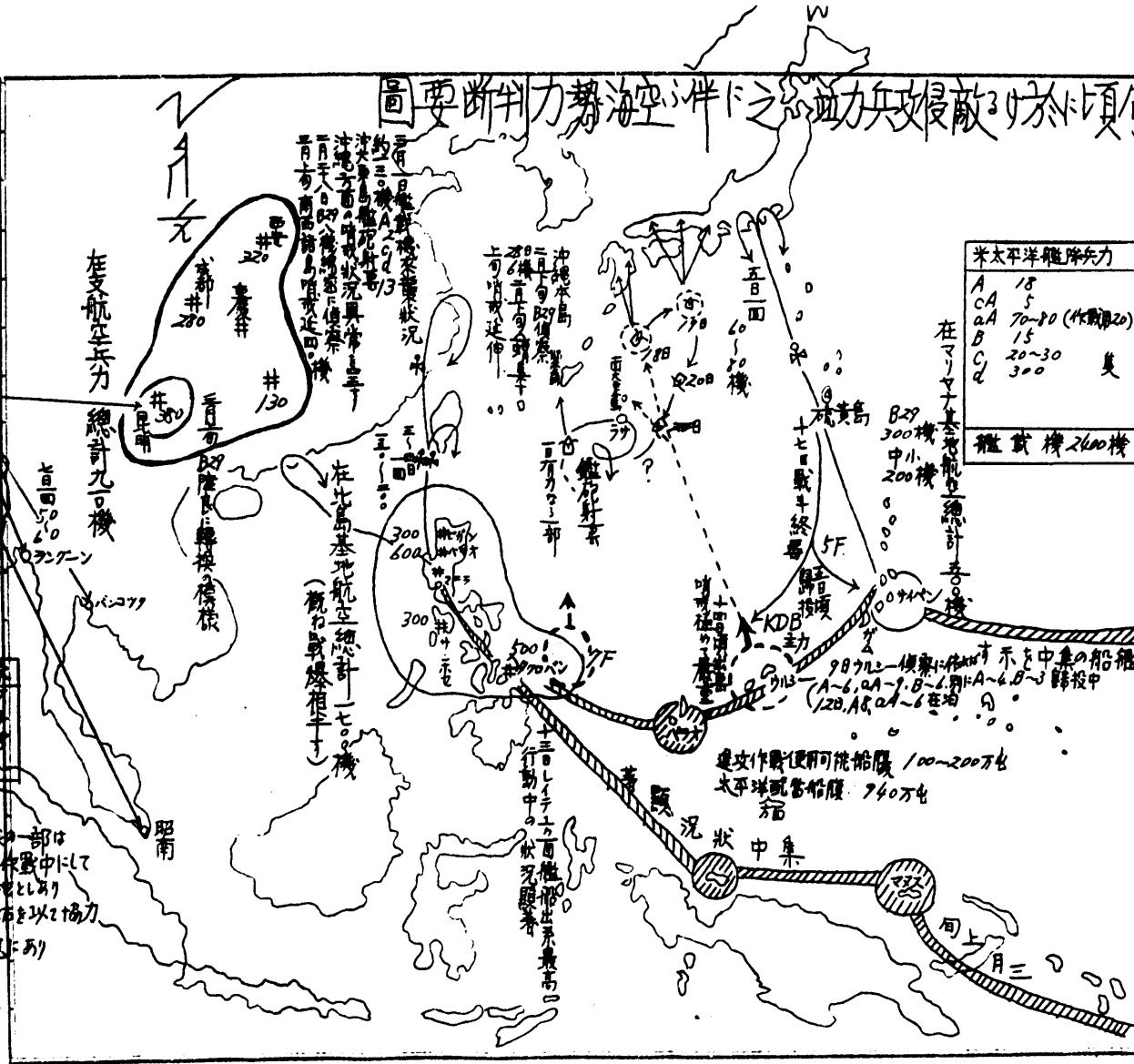
三月下旬に於ける敵の侵襲兵力の空海勢力判断要圖

附圖第一

敵の次期作戦使用可能兵力の既北島方面下の十五箇師
 航空機三ヶ師團を投入し、鑑み左の如く判断せしむ。
 本國より三ヶ師團を投入し、鑑み左の如く判断せしむ。
 中部太平洋より三ヶ師團を投入し、鑑み左の如く判断せしむ。
 南東方面より三ヶ師團を投入し、鑑み左の如く判断せしむ。
 計 七ヶ師團

A	18	
CA	5	
AA	70-80 (4戦艦20)	
B	15	
C	20-30	
D	300	美

艦載機 2600機

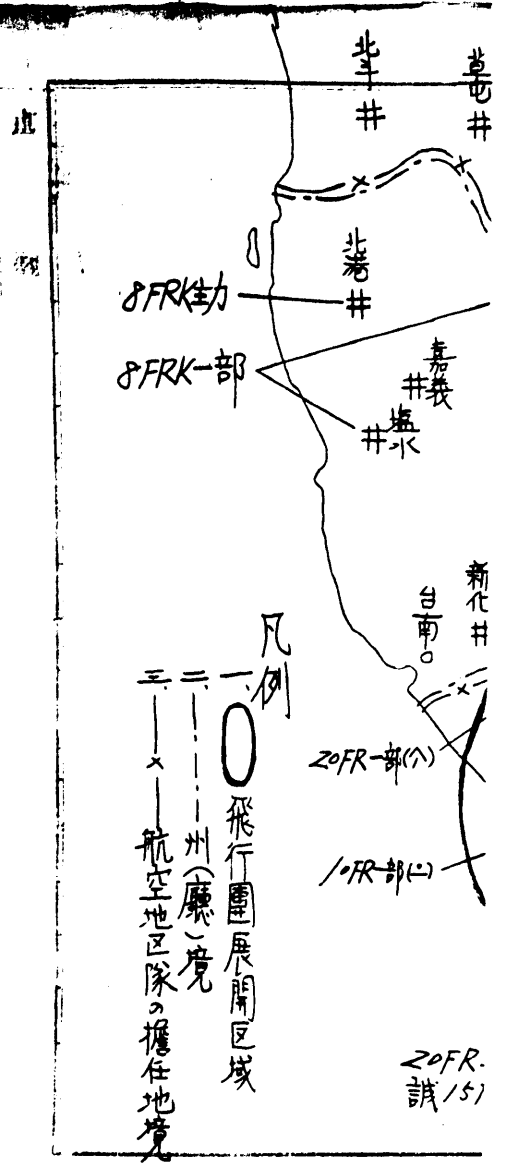


A	4	AA	1
B	2	AB	3
C	2	AC	3
D	2	AD	1

陸兵三ヶ師
 1. 英太平洋艦隊の一部は既に北島作戦に使用中にして、北島方面の状況に依りて、陸兵一、二ヶ師を以て協力の可能な状況あり

七九	隊1157	4	3	1	1			
	隊1157	10	8	1	1			
	隊1227	6	4		2			
	計	20	15	2	4			
十	隊1217	8	6	2				
	隊1217	2	2	1				
	計	11	8	3				
十四	隊157	8	2	2	4	1	5	0
	計	8	2	2	4	1	5	0
	隊10FR	23	5	8	10	10	6	11
	計	23	5	8	10	10	6	11
十四	隊113FR	21	1	8	3	8	22	0
	隊113FR	7	5	2	1			
	計	28	6	10	4	8	22	0
十五	隊10FR	21	8	5	8		3	
	隊3FR	3	2	1				
	計	24	10	6	8		3	
	合計	48	24	0	12	7	11	4
	總計		4	8	1	機	3	73名

備考
 本表操縦者中には病氣入院等所屬其の他の人員を含まざるものとす



圖要勢態開展團師行飛第八於小時始開戰作空航號天 (隊部行飛)

附圖第一
其一二

4
1
100万

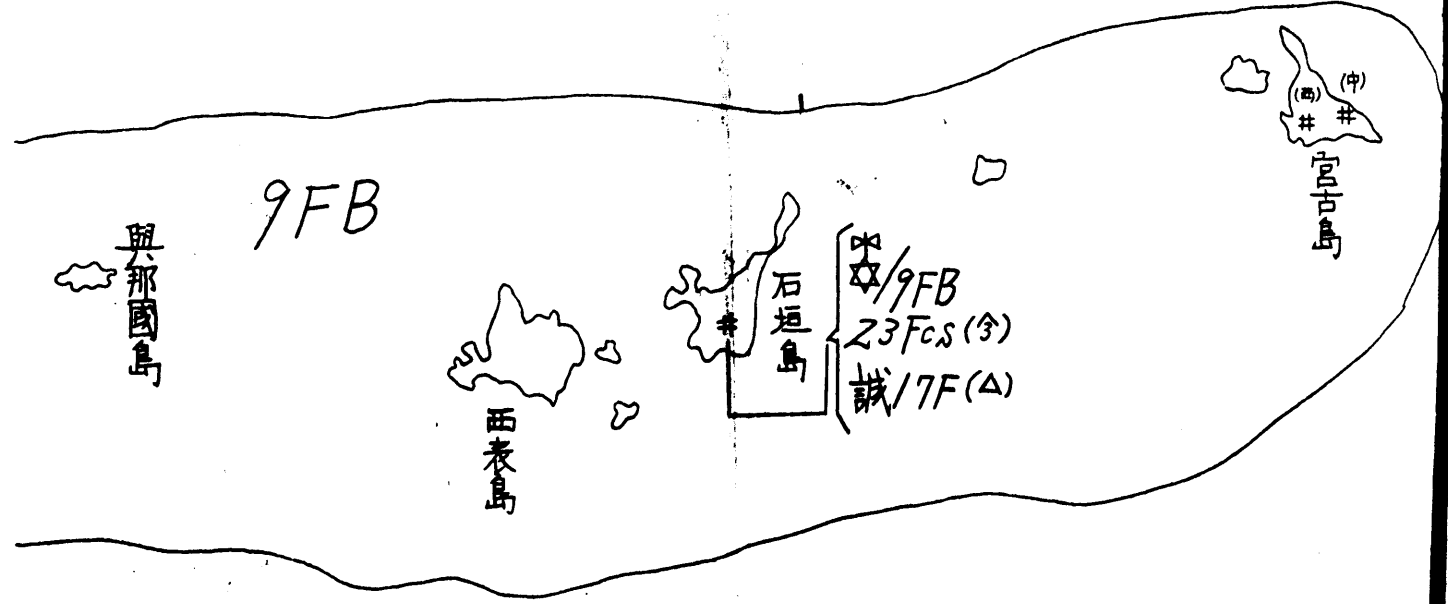
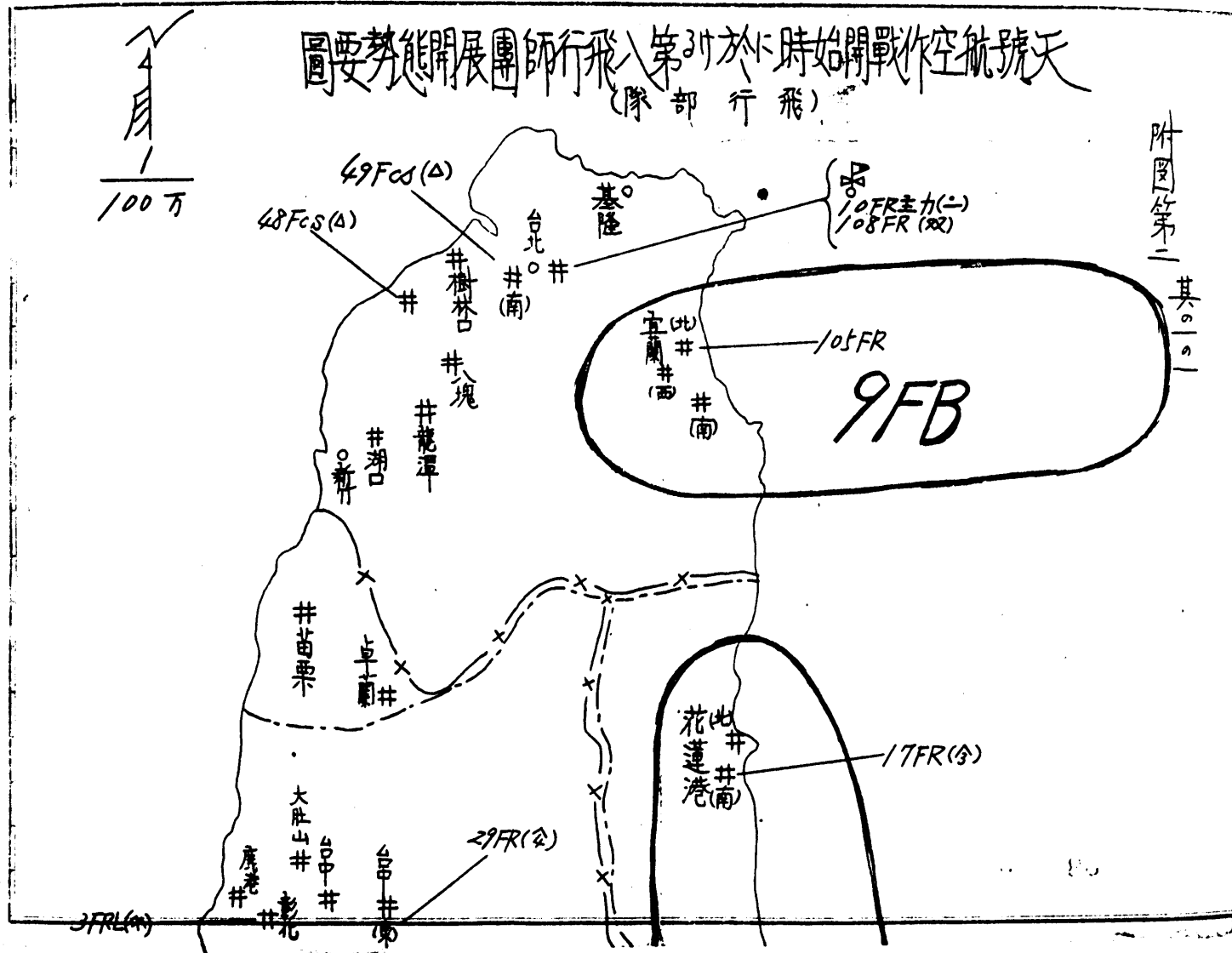


圖 者	
乙	丙
10	21
4	0
14	21
14	7
7	19
21	1
5	1
47	28
6	12
2	31
8	43
1	0
4	6
2	1
0	6
0	0
7	13

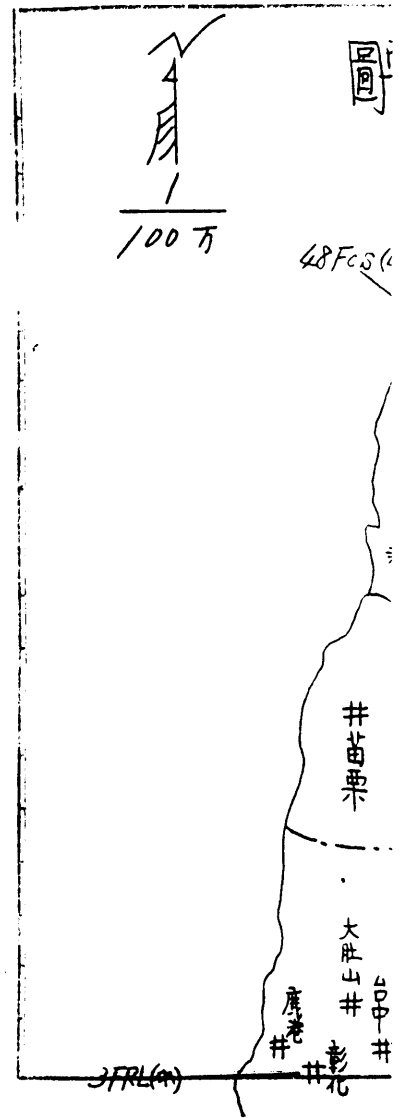


附圖第二
其 61 91

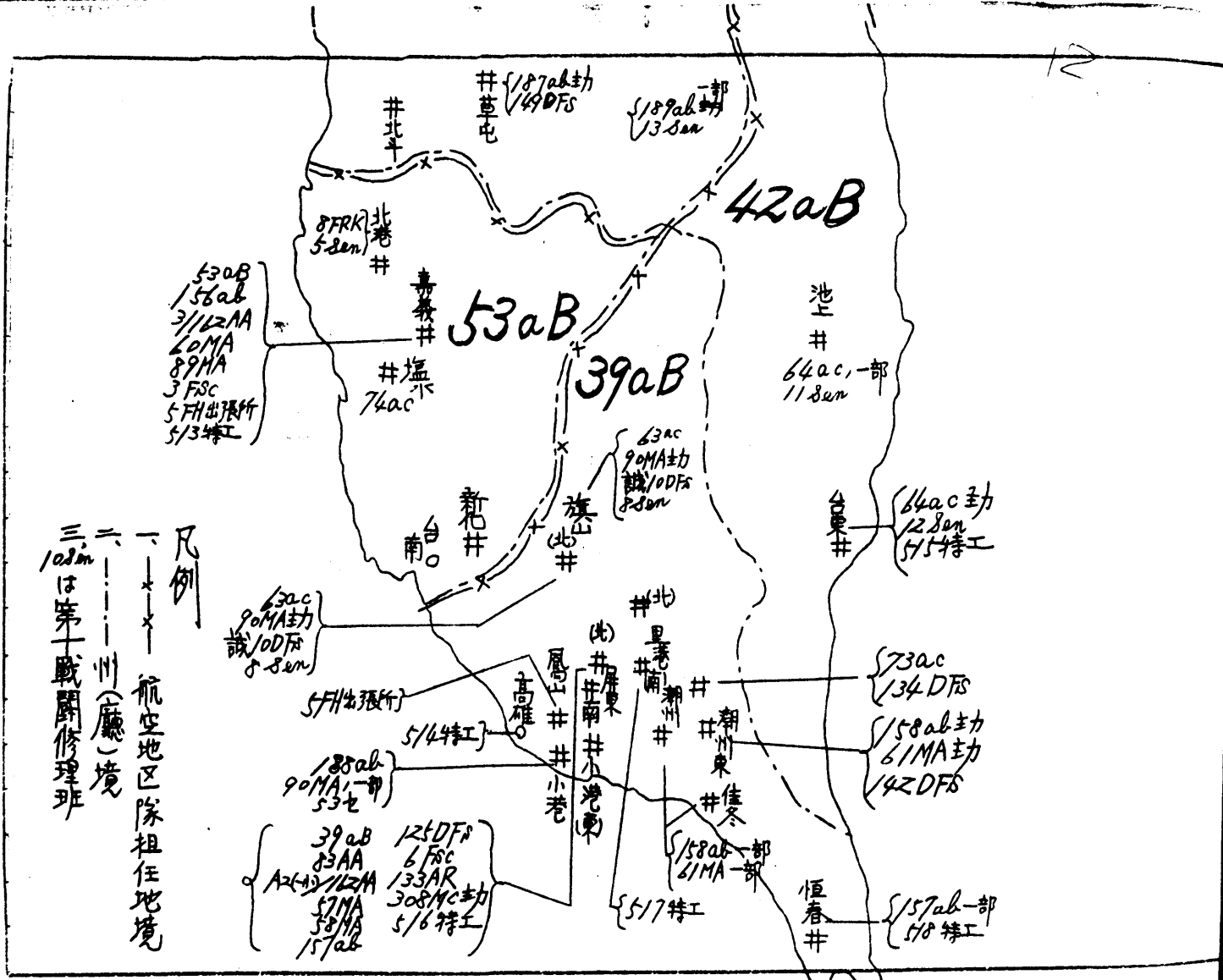
地圖第二共 101
2028
2028
2028

三月二十三日 於 け る 観 力 表

観 測	観 測 名	飛 行 機			操 縦 者			
		保管機数	甲	乙	丙	甲	乙	丙
十 四 三	20FR	20	11	4	5	10	10	21
	20FR	5	3	2	3			
	204FR	7	2	3	2			
	8FRK	4	1	3				
	観10F	14	12	2		9	4	0
	計	53	29	14	10	19	14	21
十 四 四	20FR	13		5	3			
	計	13		5	3			
十 六 一	17FR	26	9	9	8	6	14	7
	10FR	43	21	10	12	16	7	19
	108FR	45	24	11	10	19	21	1
	2270S	22	17	5	2	9	5	1
	計	136	71	33	32	50	47	28
十 八 四	20FR	25	7	8	10	2	6	12
	8FRK	19	8	6	5	4	2	31
	観120F	8	6	2				
	計	52	21	16	15	6	8	43
十 五 一	4870S	10	4	4	2	11	2	0
	4770S	10	3	3	4	8	4	6
	4870S	10	5	2	3	14	2	1
	4970S	9	4	2	3	11	0	6
	観17F	12	11	1	0	10	0	0
	計	51	27	12	12	54	7	13
十 二 七	8FRK	21	8	7	6			
	観110F	2	2					
	観117F	6	5	1				
	観122F	5	3					



出
割



凡例

一、××× 航空地区隊担任地境

二、--- 州(廳)境

三、102m は第一戦隊修理班

中區隊二
井ケレ

天號航空作戰開始時於第一飛行師團展開態勢要圖
 (地上勤務部隊)

1/100万

備考
 一、誠第一整備隊は
 依然沖繩北に飛
 行場に位置す
 ものとす



石垣島



{ 69ab
 128AR
 14 Sen

宮古島

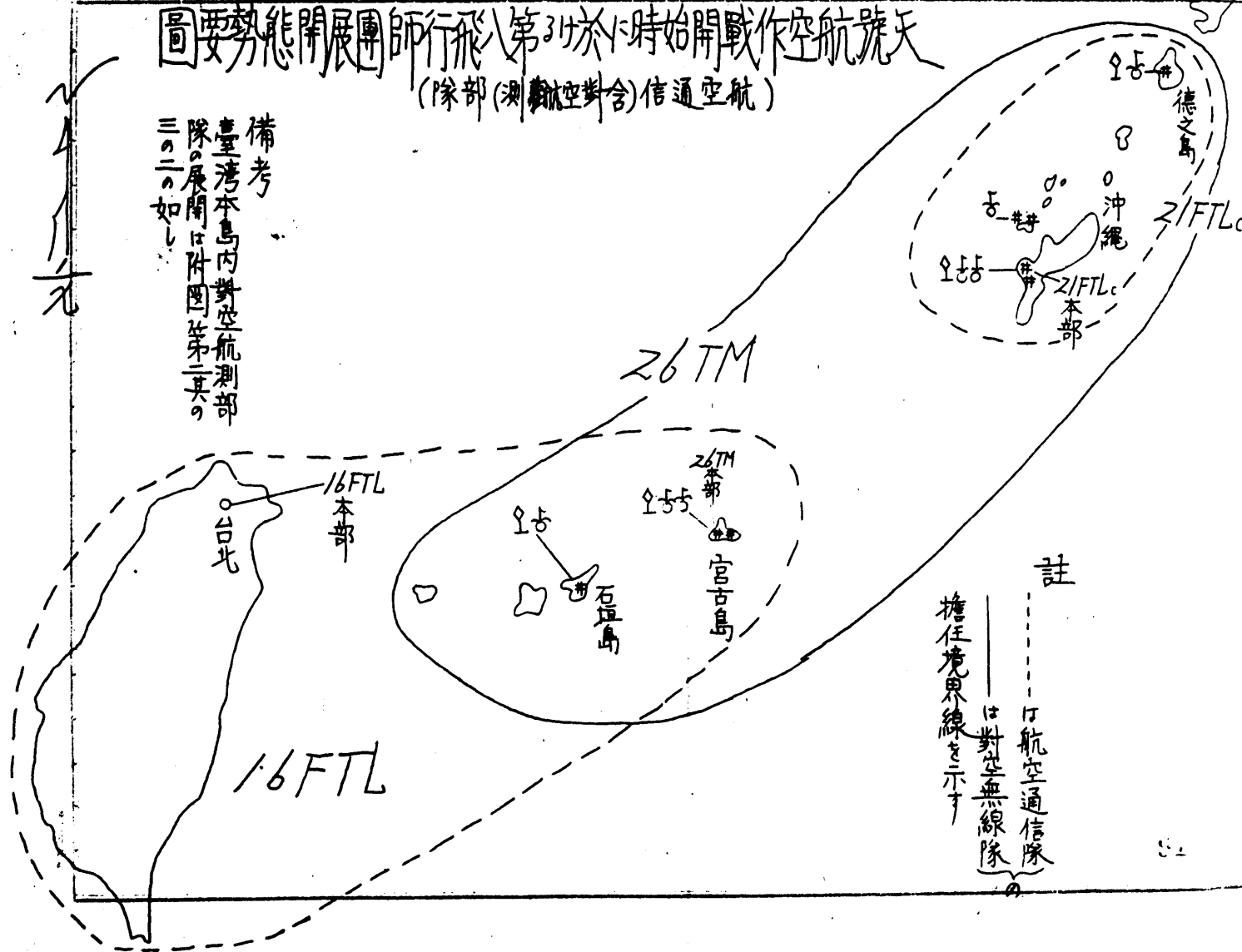


{ 205ab
 2DFs

附圖第二其の二

天航號作戰開始時於第三飛行師團展開態勢要圖 (隊部(測航空對含)信通空航)

備考
臺灣本島内對空航測部
隊の展開は附圖第二其の
三の二の如し



註
 --- は航空通信隊
 --- は對空無線隊
 擔任境界線を示す

六月下旬に於ける沖繩方面敵情要圖

4月
505

	井 状 況
北	2250x70 1950x100
中	2100x90 200x90 被中
伊江島	1750x120 1700x60
南	1500x50
小線	1300x140 1200x200 概成
東	未着手
泡瀬	1600x50 概成
金武	1500x50
恩納	500x30

航空状況
逐次基地航空兵力を推進してありKDBの後進に伴い未降機数一般に減少し、未だ九州方面爆撃機未集下を要圖島哨戒活発化せり

飛行場
B情北中伊江島極めて活潑増機到着あり既に使用しあるもの六七工事擴張中設定中

在地機總計 五二〇機

- 伊江島 在地 124
 - P51 ~ 51
 - F4U ~ 53
 - P40 ~ 1
 - C47 ~ 2
 - P35 ~ 7
- 北 在地 213
 - B24 ~ 28
 - P38 ~ 4
 - FLF ~ 188
 - TBF ~ 5
- 中 在地 186
 - A21 ~ 140
 - P38 ~ 10
 - B7A/F4U36



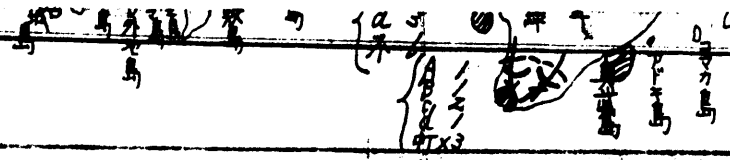
附圖第三

敵は沖繩作戦の終結を見や、激化し本土進攻の爲に空軍基地を築き兵力資材を集中してあり状況大浦湾 行場設定状況に徴し明

久米島

渡名喜島
伊波島
黒島
儀志島
伊波島
伊波島
伊波島

加の交流活
任事必要
沖縄各飛



相國策三

赤心

大敵... 本島... 敵軍... 攻撃... 戦況... 詳細な戦況報告の断片。

地上戦況

二十日天候作戦開始以来我々特攻の連日
連夜機隊連日相中の機身攻撃にも拘
らず敵は強引に最後の主抵抗線に透侵
し来り球部隊は主力を以て二十日夜間
壯烈なる反撃を実施し組織的抵抗
を終了せり

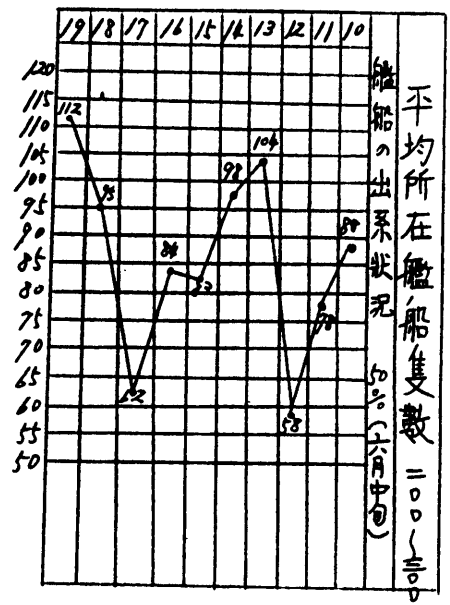
投入兵團

總計 一〇箇師團

地上兵 10A 70 270 770 960
3MC 1MD 2MD 6MD 7MD

艦船状況

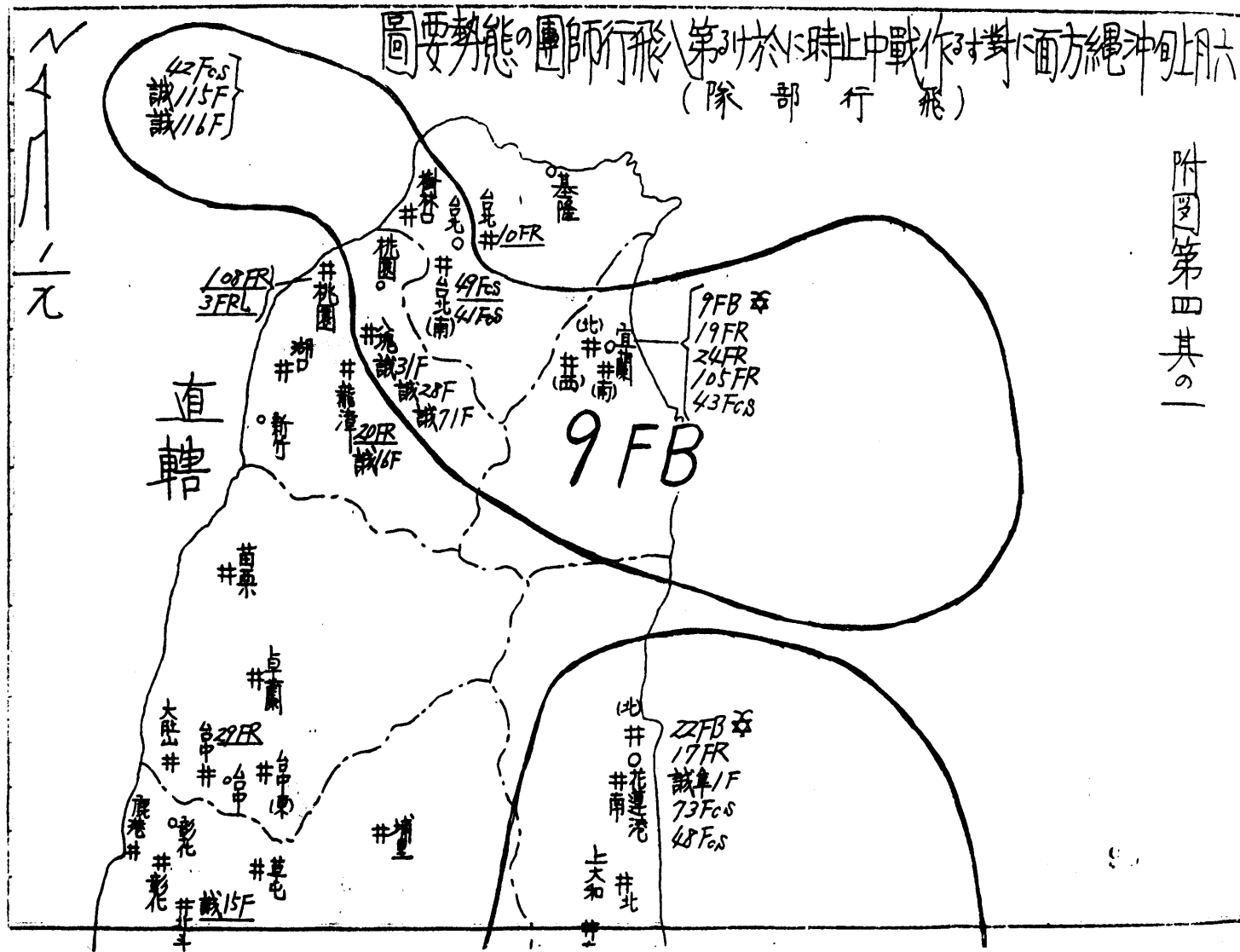
1. 38隻は一日頃よりレイテマリヤナ方面
に歸投せり
2. 先島中間海域にA至B二KB依然あり
3. 交流レイテマリヤナ極めて活発



平均所在艦船隻数 二〇〇〇年六月

辺表

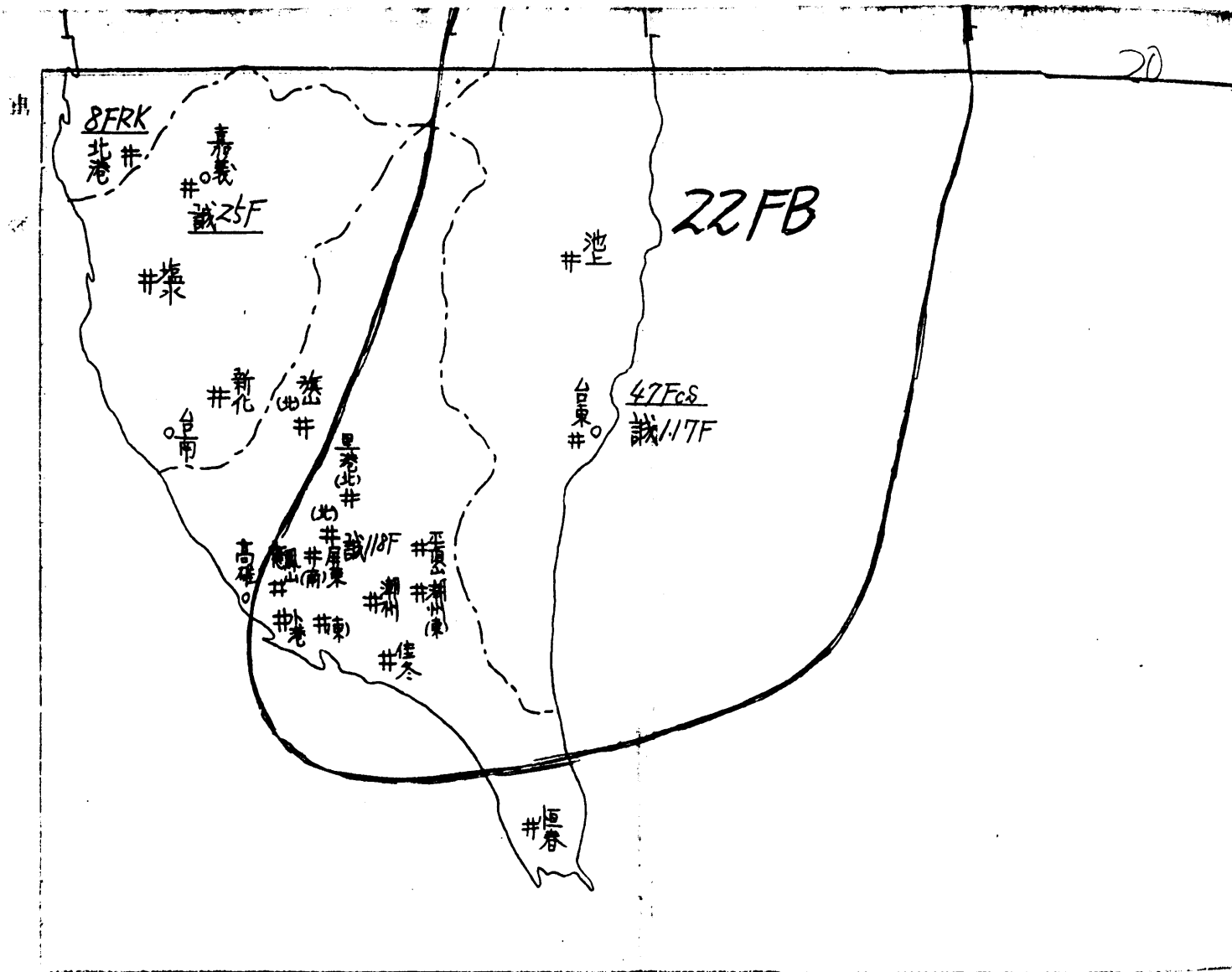
行機			標従者		
甲	乙	丙	甲	乙	丙
3	13	12	15	9	10
4	9	2	8	3	8
6	7	6			
3	1	1			
10		1			
26	30	22	23	12	18
	7	5			
	7	5			
5	3	2			
5	3	2			
5	3	2			
3	4	4	5	10	2
9	7	4	10	7	10
7	7		2	3	9
24	21	10	27	21	27
13	13	11	10	8	26
11	1	4			
	1	1			
24	15	16	10	8	26
2					
2					
3	1	3			
2	1	1			
1	4	2	2	0	11
2	3	4	3	4	9
4	4	1			
2	4	1			
2	4	1			
19	18	10	9	4	22
3	9	4	9	6	70
3	9	4	9	6	10
9	2	2			



附圖第四其の一

6	1	1			
8	12	3			
18	13	4			
2	1	1			
11	2	1			
24	3	2			
10					
2	2	5			
12	2	5			
6	3	1			
7		2	12	15	9
13	3	3	12	15	9
179	126	85	90	66	113
390機		269名			

は病氣入院等所謂其の
ものとき

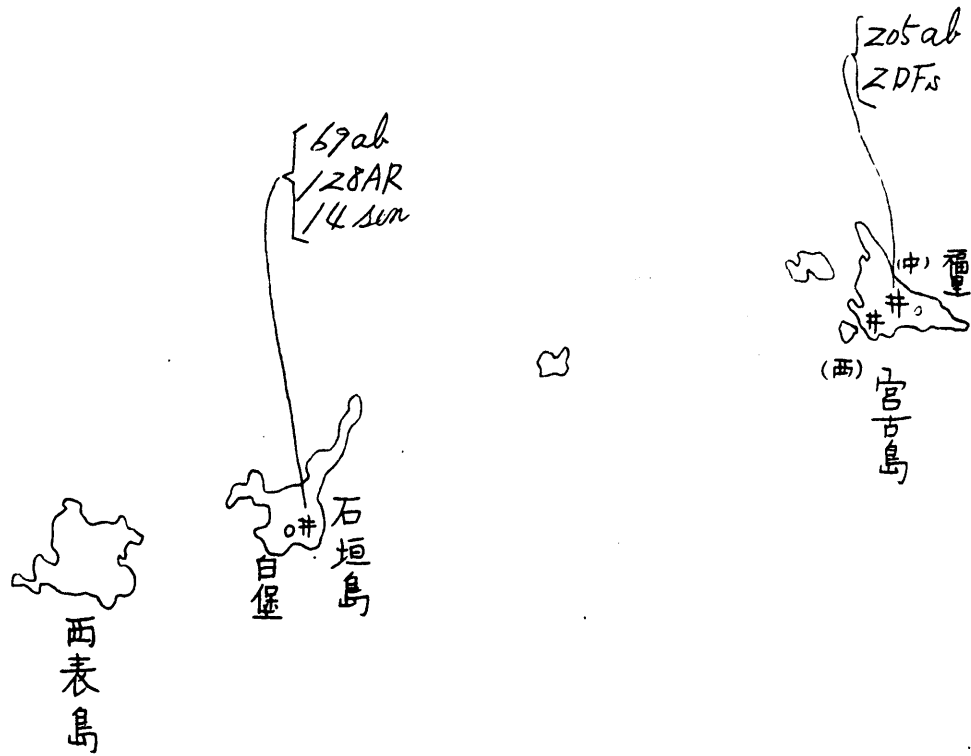


和

半區班日其の1

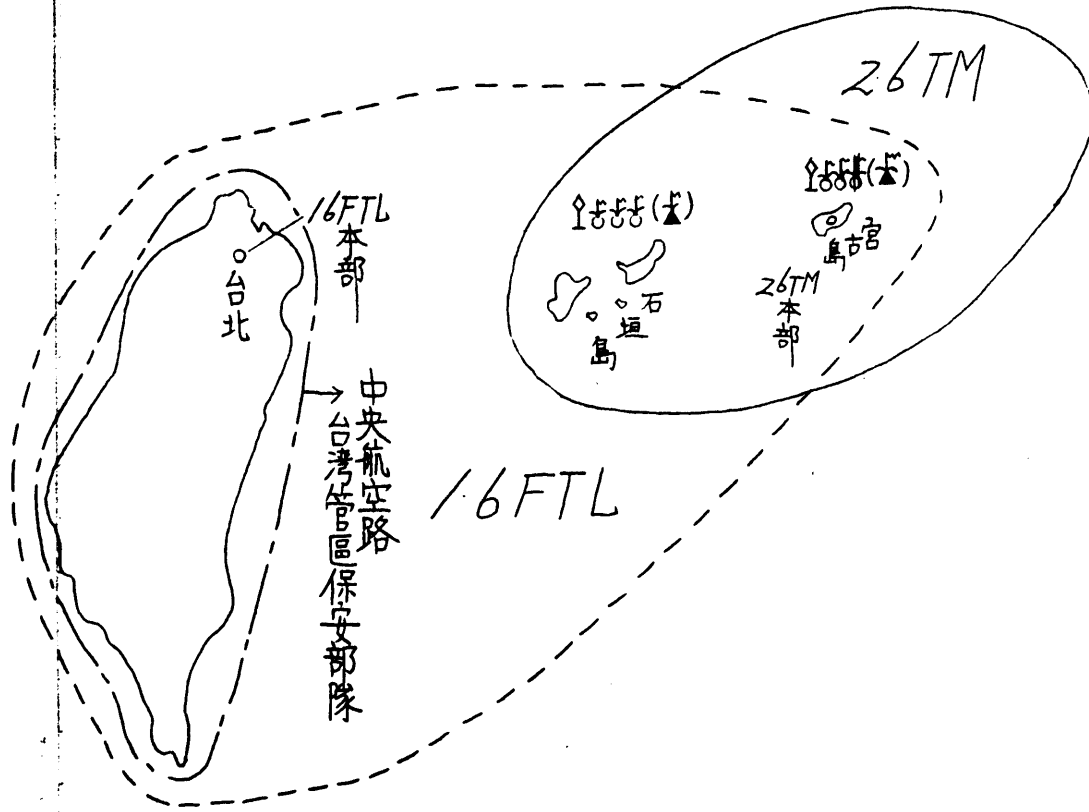
圖要勢態團師行飛入第3於時止中戰作對對面方繩沖旬上月六
 (隊部務勤上地空航)

附圖第四 其の二



六月下旬沖繩方面對作戰中止時に於ける飛行師團の態勢要圖

(航空通信隊(航空測候隊)本部)

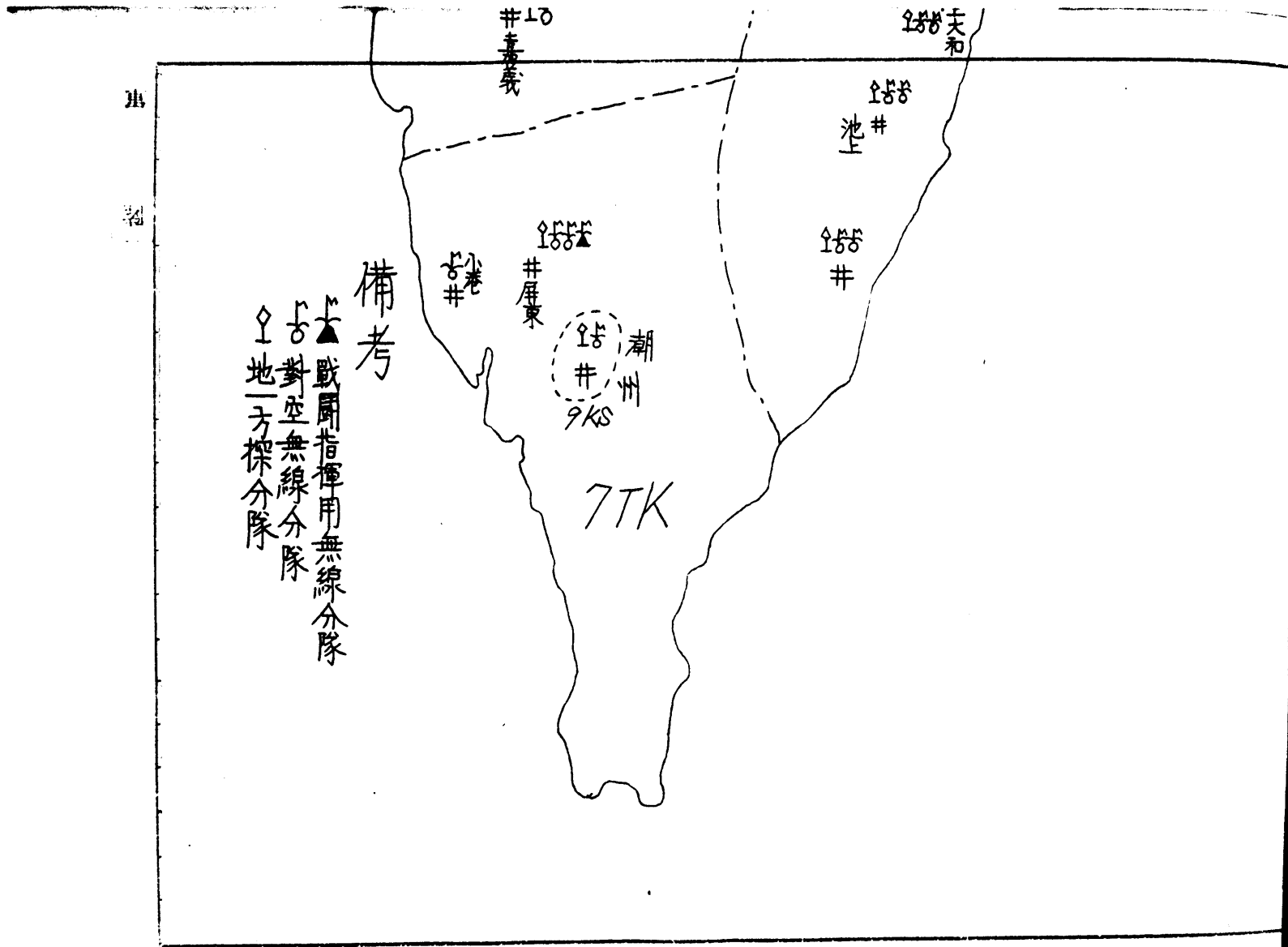


附圖第四其の三

備考

(△)は30送信機のみ
 △は對空無線分隊
 △は九四式特種受信機分隊

飛行師團の態勢要圖



備考

▲ 戰團指揮用無線分隊
 ○ 對空無線分隊
 □ 地方探分隊

六組
 中國隊目其e||e||